長野市の埋蔵文化財第 158 集

長野遺跡群

後町遺跡

－（仮称）問御所町賃貸住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2021 年 3 月

長野市教育委員会

序

彩り豊かな山並みを仰ぎ、千曲川・犀川の大河に抱かれた長野市では、悠久の歴史の中で、多様な人々の生活が営まれてきました。各地に残る伝統行事や歴史的建造物などの文化財は、郷土の成り立ちや文化を理解する上で欠くことのできないものです。中でも土地に埋蔵されている遺跡やそこに存在する遺構・遺物は、私たちの祖先の知恵と文化の集積であるとともに、当時の人々の暮らしぶりを現在に伝えてくれる貴重な財産です。

ここに長野市の埋蔵文化財第158集として刊行いたします本書は、（仮称）問御所町賃貸住宅新築工事に伴って実施した、長野遺跡群に属する後町遺跡に関する調査報告書であります。

発掘調査では、弥生時代中期の竪穴住居跡をはじめ、中世以降の柱穴、桶埋設遺構、井戸跡等を検出したほか、多量の木製品、陶磁器、土器などが出土しました。

この調査成果が地域の歴史解明の一助として、そして文化財保護に広くご活用いただければ幸いであります。

最後に、埋蔵文化財保護に対する深いご理解のもと、この調査にご協力いただいた事業者並びに地域の皆様、また、発掘作業に携わっていただいた皆様方に厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

長野市教育委員会
教育長　近藤　守

例　　言

1　本書は、民間開発事業「(仮称) 問御所町賃貸住宅新築工事」に伴い、記録保存を目的に実施された埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。

2　発掘調査地は、長野県長野市大字鶴賀字町屋敷 1303－1 外に所在し、長野遺跡群後町遺跡内に位置している。

3　発掘調査の実施については、事業主体者である株式会社 東邦不動産プラザ 代表取締役 増子健司からの委託により、長野市長 加藤久雄 が受託し、長野市教育委員会が直営事業として実施した。なお、調査は長野市埋蔵文化財センターが担当した。

4　埋蔵文化財の保護対象範囲は、開発事業面積 994.47㎡全域である。このうち住宅建設予定範囲である約 448㎡を発掘調査実施対象面積とし、実質調査面積は 443㎡である。

5　現地における発掘調査は平成 31 年 4 月 22 日から令和元年 7 月 4 日まで行った。

6　発掘調査から報告書の作成に至るまで、飯島の指導の下、田中が担当し、適宜研究員が補佐した。
執筆分担は以下の通りである。

飯島哲也　　第 1 章第 1 節
㈱イビソク　第 3 章
田中暁穂　　上記以外

7　調査で得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。出土遺物の注記記号は「ＮＧＡＴ」である。

8　発掘調査の実施に際し、委託者である株式会社東邦不動産プラザおよび土地所有者におかれては、埋蔵文化財に対して深いご理解を頂き、多大なご協力を賜った。

凡　　例

1　基準点測量および遺構測量は、平面直角座標系（国家座標）の第Ⅷ系（東経 138° 30′ 00″、北緯 36° 00′ 00″）の座標値（日本測地系 2011）と日本水準原点の標高を基準とし、株式会社写真測図研究所に委託した。

2　掲載した地図は上が真北を示す。実測図等に掲載した方位は座標北を表している。

3　掲載した図の縮尺は図ごとに記載し、個別遺構図は 1/60、遺物実測図は 1/3 を基本とした。

4　掲載した遺構写真・遺物写真の縮尺は任意である。

5　遺構番号は発掘調査で付した通し番号を基本とし、欠番や変更については遺構観察表に記載した。遺構の略記号は以下の通りである。

竪穴住居跡－ＳＢ　溝跡－ＳＤ　井戸跡－ＳＥ　土坑－ＳＫ　小穴－Ｐ　性格不明遺構－ＳＸ

6　遺構観察表および遺物観察表の凡例は、各表に付記した。

7　遺物実測図において使用したトーンは以下の通りである。また一点鎖線は施釉範囲を表す。

スス　赤彩・漆塗　礫

8　土器・焼物の分類および編年は、以下の先行研究に依拠している。

弥生土器　石川日出志 2012「Ⅱ　栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市内その３　中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター調査報告書 100（（一財）長野県埋蔵文化財センター）

珠洲焼　吉岡康暢 1994『中世須恵器の研究』（吉川弘文館）

中世焼物　全国シンポジウム「中世窯業の諸相」実行委員会 2005『中世窯業の諸相』
水澤幸一 2009『日本海流通の考古学』（高志書院）
市川隆之 2002「中世信濃産すり鉢について」『長野県考古学会誌』98 号（長野県考古学会）

中近世瀬戸窯　藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』（高志書院）
瀬戸市史編纂委員会 1998『瀬戸市史陶磁史篇』六（愛知県瀬戸市）

近世焼物　岐阜市文化振興財団埋蔵文化財センター 2006『江戸時代のやきもの－生産と流通－』

美濃焼　田口昭二 1994「美濃窯の諸様相」『瑞浪陶磁資料館研究紀要』第６号（瑞浪陶磁資料館）

肥前系　九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

京信楽系　畑中英二 2003『信楽焼の考古学的研究』（サンライズ出版）

備前焼　乗岡実 2017「備前焼の徳利」『中近世陶磁器の考古学』第７巻（佐々木達夫編、雄山閣）

越中瀬戸焼　宮田進一 1988「越中瀬戸の窯資料（1）」『大境』12 号（富山考古学会）
1998「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史』（雄山閣）

近世擂鉢　相羽重徳 2010「新潟県における近世擂鉢の流通Ⅰ（上越編）」『三面川流域の考古学』第８号（奥三面を考える会）

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査の経緯
　第１節　調査の契機と事務経過 ……1
　第２節　調査体制 ……2
　第３節　調査の経過 ……3
　第４節　遺跡の環境 ……3
第２章　調査成果
　第１節　調査概要 ……5
　第２節　弥生時代の遺構と遺物 ……7
　第３節　中世以降の遺構と遺物 ……13
第３章　自然科学分析 ……34
第４章　総括 ……39
引用参考文献
写真図版
抄録・奥付

挿図目次

図１　調査地位置図（縮尺 1/50,000）……1
図２　裾花川河岸段丘と周辺の遺跡（縮尺 1/15,000）……4
図３　後町遺跡の弥生中期遺構分布（縮尺 1/500）……5
図４　遺跡概略図（縮尺 1/250）・基本層序 ……6
図５　ＳＢ１遺構実測図 ……7
図６　ＳＢ１出土遺物実測図 ……8
図７　ＳＢ３遺構実測図 ……9
図８　ＳＢ３出土遺物実測図 ……10
図９　ＳＢ４遺構実測図 ……11
図 10　ＳＢ４出土遺物実測図 ……11
図 11　ＳＫ 22 遺構実測図 ……11
図 12　ＳＫ 22 出土遺物実測図 ……12
図 13　ＳＫ５遺構実測図 ……13
図 14　ＳＫ５出土遺物実測図 ……13
図 15　ＳＫ６遺構実測図 ……14
図 16　ＳＫ 13・15 遺構実測図 ……15
図 17　ＳＫ 13・15 出土遺物実測図 ……16
図 18　ＳＫ 14 遺構実測図 ……17
図 19　ＳＫ 14 出土遺物実測図 ……17
図 20　地下室跡遺構実測図 ……19
図 21　地下室跡出土遺物実測図（1）……20
図 22　地下室跡出土遺物実測図（2）……21
図 23　地下室跡出土遺物実測図（3）……22
図 24　ＳＫ 21 遺構実測図 ……24
図 25　ＳＫ 21 出土遺物実測図 ……25
図 26　中世遺構分布図（縮尺 1/80）……26
図 27　小穴遺構実測図 ……27
図 28　小穴出土遺物実測図 ……27
図 29　木製品実測図（1）……30
図 30　木製品実測図（2）……31
図 31　銭貨写真図版 ……33

挿表目次

表１　ＳＢ１遺構観察表 ……7
表２　ＳＢ１遺物観察表 ……8
表３　ＳＢ３遺構観察表 ……9
表４　ＳＢ３遺物観察表 ……10
表５　ＳＢ４遺構観察表 ……11
表６　ＳＢ４遺物観察表 ……11
表７　掲載外遺構観察表 ……13
表８　ＳＫ５遺物観察表 ……14
表９　ＳＫ５・６遺構観察表 ……14
表 10　ＳＫ 13・15 遺構観察表 ……16
表 11　ＳＫ 13 遺物観察表 ……17
表 12　ＳＫ 15 遺物観察表 ……17
表 13　ＳＫ 14 遺物観察表 ……17
表 14　地下室跡遺構観察表 ……19
表 15　地下室跡遺物観察表（1）……23
表 16　地下室跡遺物観察表（2）……24
表 17　ＳＫ 21 遺物観察表 ……25
表 18　小穴遺物観察表 ……27
表 19　小穴遺構観察表（1）……28
表 20　小穴遺構観察表（2）……29
表 21　木製品観察表 ……32
表 22　銭貨観察表 ……32

第１章　調査の経緯

第１節　調査の契機と事務経過

平成 30 年 11 月１日、株式会社アガタより長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センターに、埋蔵文化財包蔵の有無について照会があった。隣接地の埋蔵文化財の包蔵が確実であったため、調査地についても文化財保護法（以下、法）第 93 条に基づく届出および保護措置を講じる必要がある旨回答した。11 月８日、事業主体者である株式会社東邦不動産プラザ（以下、事業主体者）より法第 93 条第１項に基づく「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書」と、地上 11 階地下１階の共同住宅新築工事であるという事業計画書が提出された。これを受けて、11 月 20 日付で、長野市教育委員会より事業主体者あてに 30 埋第 2-209 号「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」を通知し、保護措置として発掘調査を指示した。

平成 31 年３月７日、既存建物解体の工事に伴う立会に際し、トレンチ２か所を設定して試掘を行った。その結果、既存建物による影響は少なく、埋蔵文化財が良好に遺存し、３面の検出面が想定された。４月 19 日付けで、事業主体者から「埋蔵文化財発掘調査依頼書」と「土地所有者の承諾書」が提出され、これを受理し、同日付けで、長野市教育委員会と事業主体者の間で埋蔵文化財の保護に関する協定が締結され、４月 22 日付けで、長野市と事業主体者の間で埋蔵文化財発掘調査委託契約が締結された。

発掘調査は平成 31 年４月 22 日から令和元年７月４日までの 74 日間、実質調査期間 45 日間行われた。調査終了後、長野県教育委員会教育長あてに令和元年７月９日付で元埋第 103 号「発掘調査終了報告書」を、長野中央警察署長あてに元埋第 104 号「埋蔵文化財の発見について（通知）」を提出し、事業主体者あてには同日付元埋第 102 号「発掘調査現場作業の終了及び引渡しについて（通知）」を通知した。

図１　調査地位置図（縮尺 1/50,000）

第２節　調査体制

調査は長野市教育委員会の直轄事業として長野市埋蔵文化財センターが実施した。組織は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	近藤　守
総括責任者	長野市教育委員会	教育次長	竹内裕治（令和元年度）
			樋口圭一（令和２年度）
総括管理者	長野市教育委員会文化財課	課　長	小柳仁彦
調査責任者	長野市埋蔵文化財センター	主幹兼所長	石田正路（令和元年度）
		所　長	大井久幸（令和２年度）
調査担当者	長野市教育委員会文化財課（埋蔵文化財センター担当）　課長補佐　飯島哲也		
調査機関	長野市埋蔵文化財センター		
	庶務担当	係　長	小林晴和
		事務職員	宮本博夫
		事務職員	宮崎千鶴子（令和元年度）
		事務職員	平林満美子（令和２年度）
	調査担当	係　長	風間栄一
		主　事	小林和子
		研究員	田中暁穂（主任調査員）、小野涼香（調査員）
			清水竜太、遠藤恵実子、篠井ちひろ、社本有弥（令和元年度）
			井出靖夫（令和２年度）、伊藤愛（令和２年度）

発掘調査員	向山純子
発掘補助員	後藤大地
発掘作業員	青山三枝子、植木義則、内田正征、大谷盛孝、大日方東、大日方孝、金井節、杉本千代 月岡純一、田原次郎、外舘幸洋、中村泰明、早川周一、早川美加、宮本正守、山﨑孝之
整理調査員	青木善子、市川ちず子、鳥羽徳子、武藤信子
整理作業員	飯島早苗、清水さゆり、西尾千枝、待井かおる、宮島恵子、三好明子
保存処理・自然科学分析	株式会社イビソク
Ｘ線透過撮影	長野県立歴史館
石材・種実分析鑑定	長野市立戸隠化石博物館　館長補佐　田辺智隆、研究員　中村千賀
墨書土器文字鑑定	寺田寿子、長野市教育委員会文化財課　研究員　北村美弥子
遺構測量業務委託	株式会社　写真測図研究所
重機等現物提供	株式会社　東邦不動産プラザ（本体工事請負業者：株式会社　守谷商会）

第３節　調査の経過

保護対象面積 994.47㎡のうち、建物建設範囲である 448㎡を調査範囲とし、実質調査面積は 443㎡であった。発掘調査は平成 31 年４月 22 日から開始した。調査区を東西に二分して順次行う方法のため、西区の調査から着手し、重機での表土掘削により１次面を検出した。24 日から作業員による遺構精査を行い、調査区西端から東約 4.5m の位置に人工的な段を確認した。段より西は高く整地されたとみられ、その整地面には幕末から近代の遺構が確認された。５月７日から本格的な遺構調査に入り、石で囲んだ不明遺構や土坑・小穴など中近世の遺構を調査した。13 日、ドローンによる空中写真撮影及び遺構測量を行い、14 日、遺構平面図の結線を行った。

５月 15 日、重機掘削と作業員による遺構精査を行い、２次面を検出した。西区東部はすでに１次面で検出していたため、西部の小穴密集部分の調査に重点を置いた。また竪穴建物跡とみられる遺構や土坑なども検出した。28 日、空中写真撮影・遺構測量、29 日、遺構平面図の結線を行い、３次面の深度を確認するために、調査区各所にトレンチを掘削した。30・31 日、重機掘削・遺構精査を行い、３次面を検出した。中近世の土坑２基、弥生中期後半の竪穴住居跡１軒を確認し、遺構調査に入った。６月 12 日、空中写真撮影・遺構測量を行った。土地所有者・事業者の方が調査の見学に来跡した。13 日、遺構平面図を結線し、西区の埋め戻しを開始する。

６月 17・18 日、東区の表土掘削を行う。１・２次面の深さでは遺構は確認できず、３次面まで掘削し、弥生時代中期後半の住居跡２軒、近世後半の地下室跡１基などを検出した。７月３日、空中写真撮影・遺構測量を行った。４日、遺構平面図の結線と器材の撤収を行い、現地での作業を完了した。

ドローンによる空中写真撮影

近世地下室跡の調査風景

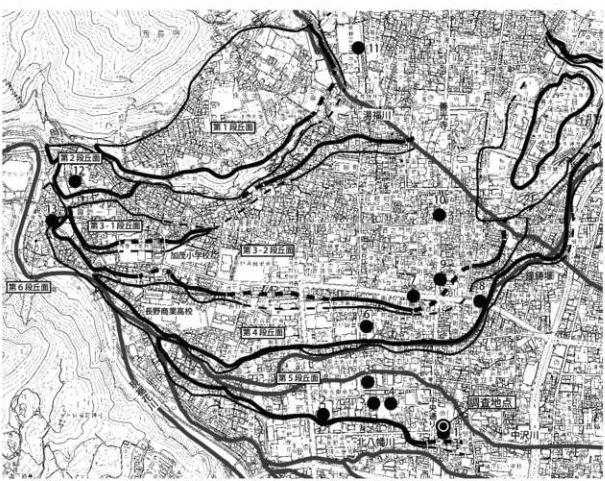
第４節　遺跡の環境

調査地は善光寺門前町の南部、源頼朝伝承で有名な十念寺の東に所在する。一帯は裾花川河岸段丘と湯福川扇状地の複合地形で、現在でも緩やかな段丘が国道 406 号線から昭和通りにかけて視認できる。湯福川は善光寺現本堂の南を北西から南東に流れていたが、宝永４年（1707）に本堂が現在地に移転したのを機に流路が変更された。裾花川は善光寺の西方に位置する旭山北嶺里島付近を扇頂とし、北西－南東方向に複数に分流していたが、近世初頭に松城（後の松代城）城代花井吉成により改修されたと伝えられ、現在は県庁西方を南流している。調査地は裾花川の河岸段丘面、県町遺跡と同一面に所在し、南には裾花川の旧流路である北八幡川が東流する。

同一段丘面に位置する県町遺跡は、昭和44年の長野国際会館地点の調査で、古墳時代後期から平安時代に至る遺構が検出された。陶製蹄脚硯や帯金具が出土し、周辺に水内郡家が存在した可能性を示唆する重要な発見とされている。平成27・28年、令和元年には3地点（図2－3・4・5）で調査が行われた。これらの調査では遺跡で初めて弥生時代中期後半の集落跡が発見された。3地点すべてで環濠が検出され、その位置関係から連続または関連性をもつとみられる。マンション建設地点・後町小学校地点ではイネ・アワなどの種実が出土し、周辺に農地が存在した可能性も指摘された。また奈良時代末期から平安時代前期の官衙周辺集落も確認された。

上位段丘においては、昭和59年の旭町遺跡の調査で縄文中期の遺構が確認され、7本の打製石斧を納めた埋設土器や、内陸地域では希少なタカラガイ形土製品が出土している。平成7年から8年にかけて調査された西町・東町遺跡は、縄文中期・弥生中期、古墳時代から近世に至る複合遺跡で、中世以降に隆盛する善光寺門前町の集落も発見された。東町遺跡から出土した弥生中期の絵画土器は、「戈を持つ鳥装の祭人」と、無頸壺の蓋に描かれた北信独特の文様を描き、畿内と北信の祭祀の融合を示唆する希少な資料と評価されている（清水2020）。

後町遺跡は、平成30年度に県庁緑町線建設に先立つ試掘調査で初めて遺跡であることが判明し、調査も行われた。中世は、善光寺門前町の町屋とみられる小穴群が検出された。近世では、重量建物基礎跡や廃棄土坑などが確認され、参道に沿って中近世の溝跡が検出されている。弥生中期後半の集落は、竪穴住居跡2軒とその東に溝跡があり、西に分布する県町遺跡と関連すると想定される。



1. 後町遺跡（県庁緑町線地点） 2. 県町遺跡（長野国際会館地点） 3. 県町遺跡（マンション建設地点） 4. 県町遺跡（後町小学校地点）
5. 県町遺跡（北野建設地点） 6. 旭町遺跡 7. 西町遺跡 8. 東町遺跡 9. 善光寺門前町跡 10. 元善町遺跡 11. 箱清水遺跡
12. 新諏訪町遺跡（旭寮地点） 13. 新諏訪町遺跡（長野西高校調査地点）

図2　裾花川河岸段丘と周辺の遺跡（縮尺 1/15,000）

第２章　調査成果

第１節　調査概要

調査区は東西約 39m、南北約 11.5m、実質調査面積は 443㎡であった。調査は東西に分割して行い、西区では１～３次面が検出された。東区は２次面までは近代の攪乱を受けており、３次面のみが検出された。調査区の地形は東へ傾斜しているが、基本層序（図４）によれば、地表からの各検出面までの深さは、１次面が 40 ～ 70㎝、２次面が 92 ～ 115㎝、３次面が 117 ～ 136㎝である。西区の１・２次面は、主に整地による人為堆積で形成されたため、東区と比べ各層が厚い。１次面以降の近代においては、西区中央から東区にかけての堆積が厚く、参道から離れた位置でも開発が進んだことが看取される。

出土遺物の年代から、１次面が幕末から近代、２次面が中世、３次面が弥生時代中期後半に相当すると判断した。ちなみに、近世後期の遺構は、厳密には１～２次面の間に存在するが、遺跡概略図（図４）では、実際に遺構検出した２次面に図示した。検出した遺構は、近代は土坑２基、近世から近代は石組の不明遺構１基、近世は土坑３基、地下室跡１基、小穴６基、整地痕跡とみられる不明遺構２基である。中世は竪穴建物跡２軒、溝跡２条、土坑８基、小穴 239 基を検出した。中近世では調査区西端、善光寺表参道である中央通りよりに遺構が偏在し、中近世の整地も同一範囲に限定されている。弥生時代は中期後半の竪穴住居跡３軒と土坑１基を検出した。調査区南側に位置する、平成 30 年度に調査された後町遺跡の集落と同時期のものと考えられる（図３）。

個別に記載しなかった遺構については、遺構観察表（表７）に掲載した。調査での出土遺物総量は 79,470g で、石製品 8,638.3g、骨角製品 15.7g、金属製品 30.2g、銭貨 71.7g、ガラス製品 15.9g、弥生土器 8,452.3g、須恵器 62.3g、土師器 5,827.9g、青磁 197.8g、中世陶器 515.1g、土器皿 1,296.9g、中近世で、土器 4,704.6g、瓦質土器 2,098.4g、土製品 3,781.6g、近世以降で、陶磁器 33,941.6g、瓦 9,819.7g である。

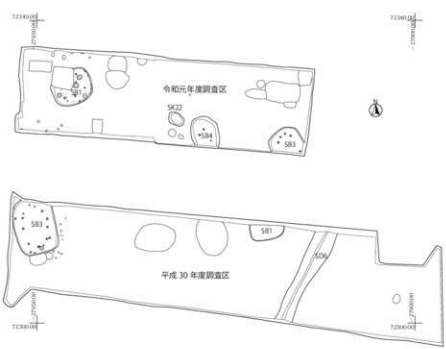


図３　後町遺跡の弥生中期遺構分布（縮尺 1/500）

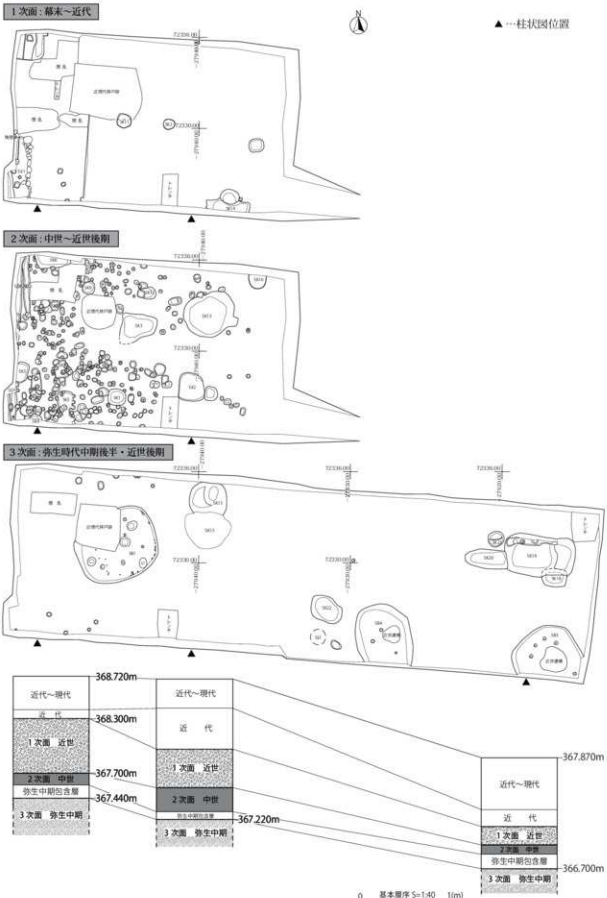
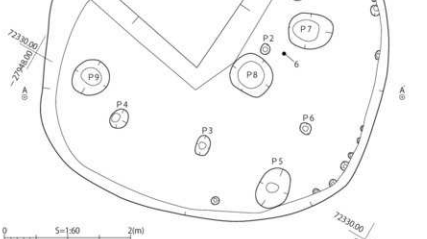


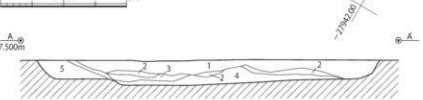
図4　遺跡概略図（縮尺 1/250）・基本層序

第２節　弥生時代の遺構と遺物

ＳＢ１

西区に位置し、現代まで残っていた井戸跡によって遺構北西部を削平されている。長軸 5.34m、短軸 4.62m、深さ 36㎝の略方形を呈する。床面の硬化はほぼなく、炉跡も確認されなかった。主柱穴は、平面規模と配置からＰ１・３・４・６と推定し、井戸跡に削平された部分にも主柱穴があったと考える。住居東壁際には直径６～16㎝の小穴９基が穿たれ、深さは 3.2 ～ 15.8㎝と差があるが、非常に小規模なものである。壁構造に関わるものと推測するが不明である。炭化材が床面直上で検出されたため、火災住居である可能性が高い。遺物の大半は２層に含まれるが、破片が多く、復元率は高くない。床面で出土した台付甕（６）が最も完形に近い出土状況である。出土した弥生土器は文様の粗雑化が進み、壺の胴部最大径が下方に移行しているため、栗林３式（石川 2012、以下略）に属すると判断される。住居跡からの出土遺物は、弥生土器 4.678g、石器・石製品 984.9g、土師器 2.959.8g、土器皿 4.6g であった。





1. 暗褐色粘土　粘性・しまりあり。炭化物。
2. 褐灰色粘土　粘性あり、しまり強。炭化物少。土器。
3. 淡黄色粘土　粘性・しまりあり。
4. 黒褐色粘土　粘性あり、しまりやや強。炭化物・焼土多。遺物。
5. 明黄褐色シルト質粘土　粘性ややあり、しまり強。炭化粒。

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深度(cm)	平面形	断面形
SB1	5.34	4.62	36.0	楕円形	台形状
P1	0.22	0.21	21.9	円形	台形状
P2	0.17	0.15	13.4	円形	台形状
P3	0.32	0.22	19.2	楕円形	U字状
P4	0.34	0.28	26.8	楕円形	台形状
P5	0.68	0.50	21.8	楕円形	半円状
P6	0.19	0.17	29.3	円形	U字状
P7	0.70	0.58	8.9	楕円形	弧状
P8	0.67	0.61	13.8	円形	弧状
P9	0.61	0.55	14.1	円形	弧状

表１　ＳＢ１遺構観察表

図５　ＳＢ１遺構実測図

ＳＢ１遺物出土状況（南東から）

ＳＢ１完掘状況（南西から）

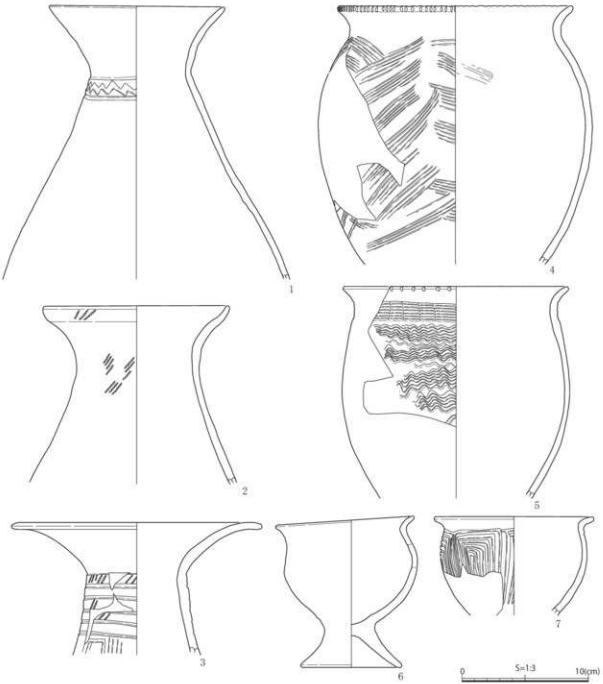


図6　ＳＢ１出土遺物実測図

( )内は残存値，砂－砂粒，石－石英，長－長石，角－角閃石，雲－雲母，赤－赤色粒，白－白色粒，黒－黒色粒

図版番号	出土位置 層位	種類	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	残存率	重量（g）	色調 内／外	胎土	成型形の特徴	備考
1	覆土南・2層	弥生土器	壺	13.7	—	(21.6)	上半5/6	806.6	にぶい黄橙・褐灰／にぶい橙	砂多，長，角，赤，白	内／細沈横走沈線文・山形沈線文	内外摩耗
2	覆土東・2層	弥生土器	壺	14.5	—	(15.5)	口～頸5/6	646.9	にぶい黄橙	砂多，石，角	縄文	内外摩耗
3	2層	弥生土器	壺	18.6	—	(10.5)	口～頸2/6	186.2	灰黄褐～にぶい黄橙	砂多，石，角，雲	内／細沈縄文・横走沈線文・垂下文	内外摩耗
4	覆土南東・2層	弥生土器	甕	18.2	—	(20.5)	口～胴2/6	419.7	にぶい黄橙／浅黄橙	雲，石，角，赤，白	内／ハケ，外／口唇キザミ・胴部羽状文単位6本	
5	2層	弥生土器	甕	17.6	—	(16.8)	口～胴2/6	420.0	にぶい黄橙	砂多，長，赤，白	内／口唇キザミ・頸部櫛歯状文単位7本・胴部波状文単位7本	内外摩耗，黒斑
6	床	弥生土器	台付甕	10.8	7.7	11.7	5/6	340.7	にぶい黄橙／灰黄褐～明赤褐	石，砂，礫，赤，白	内／ハケ・ミガキ	内外摩耗
7	覆土北東・2層	弥生土器	台付甕	12.4	—	(7.8)	口～胴3/6	127.2	にぶい黄橙／にぶい黄橙	砂多，石，角，赤，白	内／胴ロの字重ね文	内摩耗

表2　ＳＢ１遺物観察表

ＳＢ３

東区南東隅で検出した。近世の遺構により遺構中央を攪乱されている。遺構南部が調査区外となるが、平面略方形と推定され、短軸 4.38m、残存する長軸 4.14m、深さ 39㎝となる。調査区南壁で本住居の壁を検出した際に、地山である細砂層を掘り込んで構築しているのを確認したが、住居西壁では立上がりが視認できなかった。本来の西壁は図７で点線で示したようになると推定される。床面は砂層でありながら若干硬質な感触であった。炉跡は確認できなかった。５基の小穴のうち、北西側にＰ１～４が等間隔に配され、Ｐ５は南東に位置している。主柱穴とみられ、亀甲型の配置になると推測される。主柱穴の規模は直径 21 ～ 27㎝の円形で、深さは 22.8 ～ 32㎝と比較的深いものである。いずれの小穴も炭化物を含有し、Ｐ３は小穴の西寄りに柱痕が確認された。Ｐ５は覆土が２層に分層され、上層が北寄りの漏斗状を呈し、抜柱した痕跡とみられる。

掲載した遺物は、１・２は床面から５㎝の高さで、３は 10㎝の高さで出土した。甕（３）に口唇部から口縁にかけ縄文が施文される古い要素がみられるが、全体としては栗林３式に属する。住居跡からの出土遺物は、弥生土器 2,104g、土師器 746.3g、青磁 5.4g、陶磁器 207.0g、近世瓦 261.9g であった。

図7　ＳＢ３遺構実測図

（ ）内は残存値・推定形

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	平面形	断面形	備　考
SB3	(4.14)	4.38	39.0	略方形	台形状	
P1	0.27	0.25	32.0	円形	U字状	
P2	0.24	0.22	33.8	円形	U字状	
P3	0.22	0.20	22.8	円形	U字状	柱痕
P4	0.24	0.23	28.9	円形	U字状	
P5	0.26	0.21	25.5	円形	U字状	

表3　ＳＢ３遺構観察表

ＳＢ３遺物出土状況（北西から）

ＳＢ３完掘状況（上が北東）

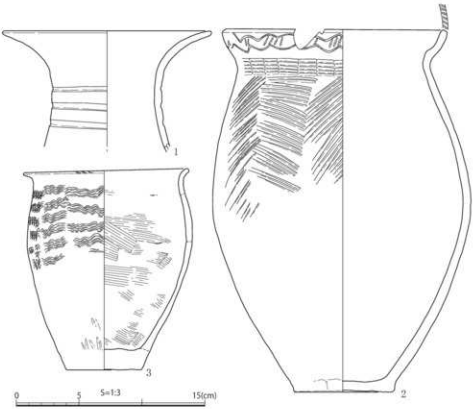


図８　ＳＢ３出土遺物実測図

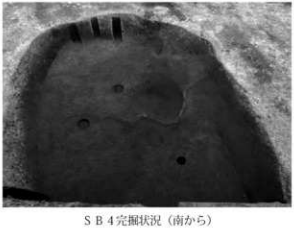
（ ）内は残存値，砂－砂粒，石－石英，長－長石，角－角閃石，雲－雲母，赤－赤色粒，白－白色粒，黒－黒色粒

掲載番号	出土位置 層位	種類	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	残存率	重量（g）	色調 内/外	胎土	成形の特徴	備考
1	南壁際・2層	弥生土器	壺	16.4	—	(9.6)	口～頸4/6	228.0	暗灰黄/にぶい橙	砂礫多，石，赤	外/頸部横走沈線文	内外摩耗
2	西・3層	弥生土器	甕	17.2	7.8	29.7	3/6	1,218.2	にぶい褐	砂多，赤	内/頸ハケ，外/口縁縄文・波状沈線文・頸部横簾状文単位5本・頸上中位縦羽状文単位5～6本	内外摩耗，黑斑
3	北西壁付近・2層	弥生土器	甕	12.9	5.9	15.8	4/6	513.3	にぶい黄橙	砂多，角，赤，白	内/頸ハケ・底指ナデ，外/口縁縄文・頸ミガキ・横走波状文単位4本	内被熱により黑化

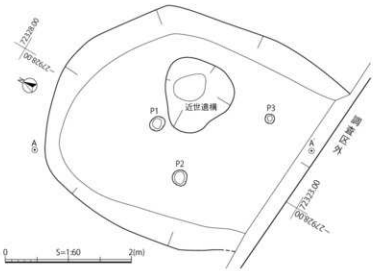
表４　ＳＢ３遺物観察表

ＳＢ４

東区南西部で検出した。遺構南部は調査区外になるため、全容は不明だが、楕円形を呈すると推測される。短軸 3.66m、長軸の残存規模は 3.87m、深さは 36cmである。遺構北東部に近世遺構による攪乱がみられた。小穴は３基しか確認できず、深さも 3.3 ～ 12cmと浅く、主柱穴としてよいか判断できない。またが跡は確認できなかった。図示できた遺物は赤彩された有孔鉢のみである。住居跡からの出土遺物は、弥生土器 268.3g、土師器 613.0g、近代陶磁器 10.3g であった。



ＳＢ４完掘状況（南から）



1. 暗褐色粘土　粘性・しまりあり。
2. 褐灰色粘土　粘性・しまりあり。
3. 黒褐色粘土　粘性・しまりあり。2 層土ブロック。
4. 暗褐色粘土　粘性・しまりあり。炭化物。
5. 黒褐色粘土　粘性・しまりあり。炭化物・橙色粒多。
6. 褐灰色シルト　粘性・しまりややあり。炭化物少。
7. 明黄褐色シルト　粘性あり、しまり強。炭化粒。

図 9　ＳＢ４遺構実測図

（）内は残存値

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深度(cm)	平面形	断面形
SB4	(3.87)	3.66	36.0	楕円形	弧状
P1	0.26	0.22	5.7	円形	弧状
P2	0.26	0.25	3.3	円形	弧状
P3	0.15	0.15	12.0	円形	半円状

表 5　ＳＢ４遺構観察表

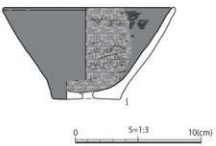


図 10　ＳＢ４出土遺物実測図

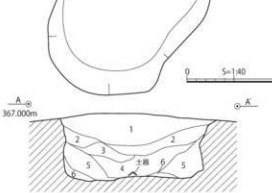
（）内は残存値，砂－砂粒，石－石英，長－長石，角－角閃石，雲－雲母，赤－赤色粒，白－白色粒，黒－黒色粒

掲載番号	出土位置 層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	重量(g)	色調 内/外	胎土	成整形の特徴	備考
1	覆土	弥生土器	有孔鉢	13.6	5.2	7.3	3/6	182.1	赤褐/にぶい橙	石，長，角，雲，赤，白	ハケ・ミガキ・赤彩，底孔1	内スス付着，外剥離

表 6　ＳＢ４遺物観察表

ＳＫ 22

東区南西部で検出された。長さ 2.32m、幅 1.6m、深さ 64cmで、やや不整な楕円形を呈し、断面は箱形状となる。覆土は人為堆積の可能性が高いが不明である。土器は焼土や炭化物を多量に含む４層から多く出土している。栗林３式とみられる甕を図示した。口径 26.3cm、底径 7.6 cm、器高 30.2cmになる。全体の 2/6 程度残存し、重量は 763.0ｇである。色調はにぶい橙色で、胎土に石英・砂粒・赤色粒を含む。胴部外面の縦羽状文は５本を１単位とする。被熱により脆弱になったため、器面の剥離が著しい。出土遺物は、弥生土器 1,349.2g、石器剥片 1.5g、土師器 952.8g である。



1. 暗褐色粘土　粘性・しまりあり。炭化物・土器。
2. にぶい黄褐色粘土　粘性・しまりあり。炭化物少。
3. 褐色粘土　粘性・しまりあり。炭化物やや多。焼土少。
4. にぶい黄褐色粘土　粘性あり。しまりやや弱。焼土・炭化物多。粘土ブロック少。土器。
5. 明黄褐色粘土　粘性・しまりあり。ややシルト質。炭化物微量。土器。
6. 黄灰色砂質シルト　粘性弱。しまりやや弱。炭化物・焼土少。粘土小ブロック少。

図 11　ＳＫ 22 遺構実測図

ＳＫ 22 土層堆積状況（東から）

ＳＫ 22 遺物出土状況（北東から）

図 12　ＳＫ 22 出土遺物実測図

第３節　中世以降の遺構と遺物

調査の都合上、西区の近現代井戸跡より東では１・２次面を同一面として調査し、中世から近代までを同時に検出した。出土遺物を検討して遺構の時期を判断し、遺跡概略図（図４）では幕末以降について１次面の遺構として図示した。

中世以降の概要は以下の通りである。調査区西側に南北に通る参道に沿って、ＳＤ１・２が中世に構築された。その東に小穴や竪穴建物跡が 13 世紀から 15 世紀にかけて確認される。近世段階には参道沿いが一段高く整地されるが、建物跡は確認できなかった。東部には井戸跡や地下室跡、廃棄土坑などがあり、町家裏手として利用されている。

掲載外の中世から近代の遺構は右に挙げたが、小穴は 245 基と非常に多いため、小穴の項に小穴遺構観察表（表 19・20）を別掲した。

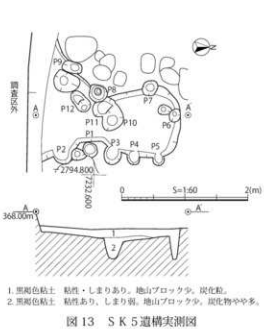
（ ）内は残存値、上器は中近世

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深度(cm)	平面形	断面形	備　考
SB1	(11.1)	(0.3)	7.7	—	—	中世
SB2	(11.1)	0.4	7.7	—	—	中世，青磁41.3 g
SK1	1.16	1.06	30.0	—	—	中世，魚生土器10.8 g，土師器15.7 g，陶器21.8 g，土器皿31.9 g
SK2	78	68	11.1	—	—	19世紀前半，陶磁器796.8 g，土器29.1 g
SK3	1.37	(0.74)	16.9	—	—	13世紀後半～14世紀，土師器98.4 g，中世須恵器25.9 g，土器皿1.2 g
SK4	0.88	(0.33)	23.1	—	—	中世，土器皿19.0 g
SK7	欠番	—	—	—	—	—
SK8	0.64	0.64	11.2	—	—	＜P204，中世
SK9	0.8	0.86	37.9	—	—	13～14世紀前半，青磁8.9 g，土師器36.5 g，土器21.6 g
SK10	1.05	1.1	10.3	不整形	—	＜P201・202，中世，土師器6.7 g
SK11	0.94	0.94	11.9	円形	—	近代，動物埋葬，陶磁器2.4 g，土器皿8.5 g，土器15.5 g，ガラス11.8 g，骨角製櫛ブラシ15.7 g
SK12	0.96	0.8	7.4	方形	箱状	＜P233・243，中世，土師器10.5 g，土器皿2.0 g
SK16	1.2	(0.9)	42.6	円形	—	19世紀初頭，動物埋葬，陶磁器51.84 g，鐵釘
SK17	欠番	—	—	—	—	—
SX1	(3.94)	1.5	16.0	方形	台形状	近世～近代，石組，土器皿56.4 g
SX2	1.16	1.9	16.1	方形	弧状	近世整地層か，土器皿2.3 g，陶磁器184.9 g，土器6.5 g，土製品12 g
SX3	2.26	1.68	19.0	不整形	弧状	近世整地層か，土器皿2.5 g，陶磁器27 g
SE1	外径 1.44	内径 1.0	未完掘	円形	—	廃棄用石組井戸，時期不明

表７　掲載外遺構観察表

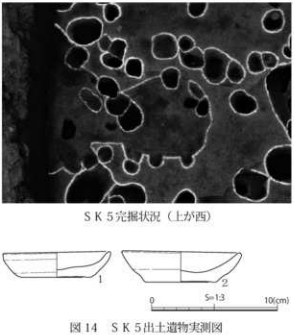
ＳＫ５

西区南西部で検出した竪穴建物跡である。調査当初、北にＳＫ７、南にＳＫ５の２基の土坑が重複すると想定していたが、遺構東壁に小穴が並ぶ配置を根拠として、一体の遺構と判断した。長軸は残存値で 2.2m、短軸は 72㎝～ 1.98m、深さ 18㎝である。壁に配置された小穴は竪穴建物の構造に関係するものとみられるが、内部で検出したＰ 10 ～ 12 については重複する小穴の可能性もある。本遺構からの出土遺物は、土器皿 215.6g、須恵器 20.7g、不明土器 3.1g であった。



1. 黒褐色粘土　粘性・しまりあり。地山ブロック少。炭化粒。
2. 黒褐色粘土　粘性あり、しまり弱。地山ブロック少。炭化物やや多。

図 13　ＳＫ５遺構実測図



ＳＫ５完掘状況（上が西）

図 14　ＳＫ５出土遺物実測図

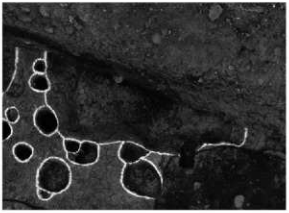
( )内は残存値，砂一砂粒，石一石英，長一長石，角一角閃石，雲一雲母，赤一赤色粒，白一白色粒，黑一黑色粒

掲載番号	出土位置 層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	重量(g)	残存率	色調 内/外	胎土	成整形の特徴	備考
1	覆土	土器	皿	8.4	5.3	2.0	51.4	5/6	にぶい黄橙	雲・石・砂・赤	ロクロ成形，回転糸切	—
2	覆土	土器	皿	9.2	4.8	2.3	96.2	6/6	浅黄橙	雲・石・砂・赤	ロクロ成形，回転糸切	口唇部黒分的にススが付着

表8　ＳＫ５遺物観察表

ＳＫ６

調査区北西隅、ＳＤ２の東で検出した竪穴建物跡である。調査区北壁に掛かるため、全容は不明である。長軸2.24m、残存する短軸は1.08m、深さは12.8㎝と浅く、断面台形状である。建物外周には、西から南にかけて、６基の小穴が付属する。直径13～34㎝、深さ10.3～25.3㎝である。残りの外周にも小穴は存在する可能性はあるが、後世の攪乱を受け、不明である。遺物は出土しなかった。



ＳＫ６完掘状況（上が北西）

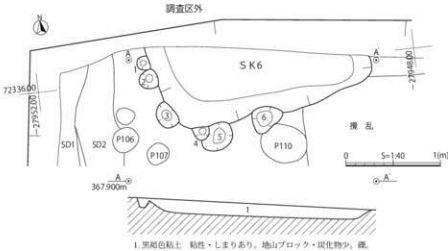


図15　ＳＫ６遺構実測図

( )内は残存値

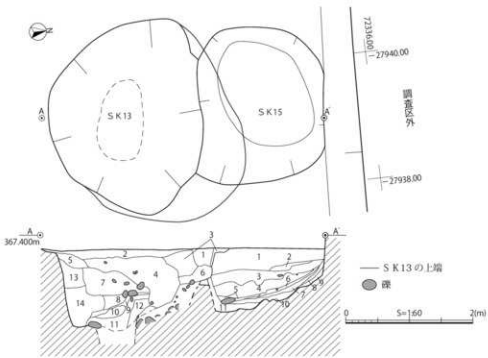
遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深度(cm)	平面形	断面形	備考
SK5	(2.20)	0.72～1.08	18.0	不整形	弧状	
P1	0.22	0.22	7.4	円形	台形状	
P2	0.28	(0.26)	5.0	円形	台形状	
P3	0.28	(0.24)	6.0	円形	台形状	
P4	(0.2)	0.19	8.9	円形	台形状	
P5	(0.2)	0.18	12.4	円形	台形状	
P6	0.21	0.19	60.1	円形	U字状	P169から変更，土器内耳鍋
P7	0.24	0.23	29.3	円形	U字状	P154から変更
P8	0.35	0.26	44.7	円形	箱段状	P174から変更
P9	0.32	0.17	20.0	楕円形	U字状	柱痕，P80から変更，土器内耳鍋

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深度(cm)	平面形	断面形	備考
P10	0.37	0.32	34.1	円形	U字状	P181から変更
P11	0.38	0.24	25.3	円形	U字状	P182から変更
P12	0.37	0.22	19.2	楕円形	箱段状	P244から変更
SB6	2.24	(1.08)	12.8	—	台形状	
P1	0.14	0.14	10.3	円形	U字状	
P2	0.20	0.20	18.0	円形	U字状	
P3	0.28	0.20	25.3	楕円形	U字状	
P4	0.17	0.13	17.5	円形	U字状	>SB6P5
P5	0.34	0.30	17.1	円形	U字状	<SB6P4
P6	0.32	0.30	15.2	楕円形	U字状	

表9　ＳＫ５・６遺構観察表

ＳＫ 13

西区北東部で検出された。２次面で検出したが、深い遺構であったため、さらに３次面で調査したが、完掘することはできなかった。遺構断面は階段状で、上段には大きい円礫が散在する状況が確認された。上段側面にも積み重ねた礫がみられ、断面形からも井戸である可能性が高い。４層は井戸埋土とみられ、図示した遺物、２・３が出土している。２は色調の異なる鉄釉を掛け分け、見込みは無釉で、釉止めの段を有する越中瀬戸焼の皿と考えられる。３は肥前系陶器鉢で鉄釉を施釉する。底部の特徴から大橋Ⅰ・Ⅱ期とみられる。１は肥前系陶器の灰釉折縁皿で、平戸・三川内窯の製品と考えられる。これらの遺物から遺構の埋没年代は 17 世紀前半と推定した。出土遺物の総量は、近世陶磁器 566.3g、近世土器皿 181.1g、青磁 17.4g、中世陶器 36.0g、瓦質土器 116.8g、土師器 19.3g であった。中世に属する遺物は重複するＳＫ 15 からの混入と考えられる。



ＳＫ13
1. 黒褐色粘土　粘性あり、しまり弱。炭色粘土ブロック。錆化。
2. 暗褐色粘土　粘性・しまりあり。炭化物少。２次面整地土。
3. 黒褐色粘土　粘性・しまりあり。地山小ブロック多。小礫・炭化物少。
4. 黒色粘土　粘性強。しまり弱。50 ㎝大以下礫ややを多。炭化物・橙色粒・遺物。
5. 暗灰色粘土　粘性・しまりあり。地山ブロックややを多。
6. 黒褐色シルト　粘性やや弱、しまりあり。地山ブロックややを多。橙色粒。
7. 黒色粘土　粘性・しまりあり。細砂少。7 ㎝大以下礫多。
8. 黒色粘土　粘性あり、しまりやや弱。細砂少。
9. 暗灰色粘土　粘性・しまりやや弱。炭化粒・小礫。
10. 黒褐色粘土　粘性・しまりあり。地山ブロック多。炭化粒・小礫。
11. 黒色粘土　粘性あり、しまりやや弱。錆化。炭化粒・小礫多。
12. 暗灰色粘土　粘性・しまりやや弱。錆化。
13. 6 層と同質。小礫多。
14. 黒色粘土　粘性・しまりあり。礫。

ＳＫ15
1. 単黄褐色粘土　粘性・しまりあり。
2. 黄灰色粘土　粘性ややあり。しまりあり。炭化物層状。
3. にぶい黄褐色粘土　3 ㎝大以下礫。
4. 灰色シルト　粘性弱。しまりあり。5 ㎝大以下小礫。
5. 灰白粘土　粘性・しまりあり。炭化粒。
6. 灰色粘土　粘性・しまりややあり。地山ブロック。炭化物層状。
7. 黒色土　粘性・しまりなし。炭化物層。
8. 黒色粘土　粘性あり、しまり弱。炭化物非常に多。地山ブロック。
9. 暗灰色土　粘性弱。しまりなし。炭化物層。
10. 浅黄色粘土　粘性・しまりややあり。炭化物ブロック。
11. 灰色粘土　粘性あり、しまり弱。炭化物。

図 16　ＳＫ 13・15 遺構実測図

ＳＫ 15

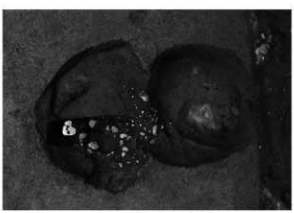
ＳＫ 13 と重複して、調査区北壁際に３次面で検出された。深さ 1.02m あり、５～８層に灰色粘土層と黒色の炭化物層が薄く堆積しているが、その性格は不明である。ＳＫ 13 に削平され、本来の形状が残存していないことが想定される。図示したのは珠洲焼片口鉢で、ロクロ成形で底部静止糸切、体部外面下端に指圧痕がある。内面の卸目の条数は不明だが、間隔が広いことから、吉岡編年Ⅲ期、13 世紀後半の所産と考える。出土遺物の総量は中世須恵器 505.4g、青磁 8.2g、土器皿 7.5g、土師器 7.1g であった。

（ ）内は残存値・推定形

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深度(cm)	平面形	断面形	備　考
SK13	3.38	2.81	調査部分120	(円形)	階段状	>SK15, 17世紀前半, 未完掘
SK15	2.46	(1.95)	102	(円形)	(半円状)	<SK13, 13～14世紀

表 10　ＳＫ 13・15 遺構観察表

ＳＫ 13 遺物出土状況（南東から）



ＳＫ 13・15 完掘状況（上が西）

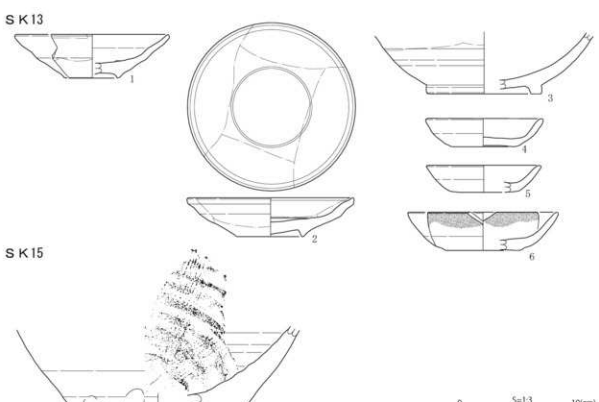


図 17　ＳＫ 13・15 出土遺物実測図

( )内は残存値、砂－砂粒、石－石英、長－長石、角－角閃石、雲－雲母、赤－赤色粒、白－白色粒、黒－黒色粒

掲載番号	出土位置 層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	重量(g)	色調 内/外	胎土	釉薬 ( )内は色調	成整形の特徴	備考
1	覆土	肥前系陶器	皿	12.2	4.3	3.5	1/6	49.7	—	灰白～黄灰、精良・堅緻	灰釉(灰色)	ロクロ成形、外体下半～底無釉、砂目痕	大堀Ⅰ期後半、1590～1600年代
2	上層	越中瀬戸	皿	13.1	5.3	3.1	6/6	251.8	—	浅黄橙、石・砂・雲・赤	鉄釉(黒褐～灰オリーブ・にぶい・赤褐)	ロクロ成形、外体下～底削り出し、見込輪止めの段、底部・見込無釉、輪接け分け	宮田分類Ⅲ3、17C前半、重ね焼き痕
3	覆土	肥前系陶器	鉢	—	9.0	(4.9)	1/6	179.7	—	にぶい黄橙	鉄釉(黒褐)	ロクロ成形、外体下～底削り出し	—
4	覆土	土器	皿	9.0	5.0	2.2	4/6	61.6	にぶい橙	精良・堅緻、砂・石・雲・赤	—	ロクロ成形、回転糸切	産地不明、近世、スス口唇部ヨゴレ、見込1ヶ所
5	覆土	土器	皿	9.0	5.5	2.2	2/6	31.0	にぶい橙	精良・堅緻、砂・雲	—	ロクロ成形、回転糸切	産地不明、近世
6	覆土	土器	皿	11.7	6.0	3.0	4/6	35.6	灰黄褐	精良・堅緻、砂・雲	—	ロクロ成形、回転糸切	産地不明、近世、口縁部・外体下スス付着

表11　ＳＫ13遺物観察表

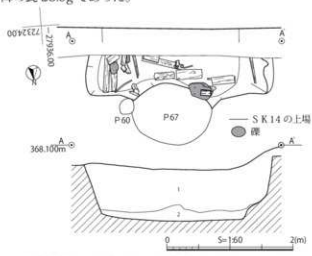
( )内は残存値、砂－砂粒、石－石英、長－長石、角－角閃石、雲－雲母、赤－赤色粒、白－白色粒、黒－黒色粒

掲載番号	出土位置 層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	重量(g)	色調 内/外	胎土	成整形の特徴	備考
1	覆土	珠洲	片口鉢	—	12.8	(7.6)	5/6	699.0	灰/灰～灰白	砂・雲・海綿骨針	ロクロ成形、外体下端指圧痕、静止糸切、鉢目条数不明だが間隔広	吉岡Ⅲ期、1250～1300年代、使用痕

表12　ＳＫ15遺物観察表

ＳＫ14

西区東南隅南壁で検出した。長軸2.81m、残存する短軸は80cm、検出した２次面からの深さは約20cmであるが、断面で確認した実際の深さは1.04mである。平面方形で、板状・丸太状の木材が比較的整然と並んで出土した。また重複するＰ67との接点に１対の縦杭が打設され、木材を使用した遺構の可能性も考えられる。図示したのは人形で、蓮華座と衣文が表現されていることから、如来・菩薩の像であろう。近世陶磁器を若干含むが、近代がほとんどである。陶磁器188.1g、土器15.6g、近世以降の瓦23.9gであった。



1. 灰色粘土　粘性・しまり強。明オリーブ灰色粘土ブロック多。15cm以下礫多。炭化物・焼土片・陶磁器・土器。
2. 青灰色粘土　粘性・しまり非常に強。グライ化。炭化物・礫。

図18　ＳＫ14遺構実測図

ＳＫ14遺物出土状況（上方南）

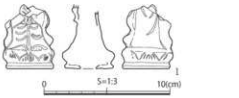


図19　ＳＫ14出土遺物実測図

( )内は残存値

掲載番号	出土位置 層位	種類	器種	法量(cm) 底径	幅	器高	残存率	重量(g)	色調 内/外	胎土	成整形の特徴	備考
1	覆土	土製品	人形	底径3.6	1.9～4.1	(5.1)	胸部以下	25.4	灰白	精良	中空、底部穴孔、前後押型成形後接合、蓮華座・衣文、素焼	産地・年代不明、如来か菩薩

表13　ＳＫ14遺物観察表

地下室跡（ＳＫ 18～20）

地下室跡は東区３次面で検出したが、上部は近代以降の削平を受けて残存していない。遺構確認の段階では複雑な平面形をしていたため、数基の遺構が重複している可能性も想定し、遺物を４遺構に分割して取り上げた。整理段階で遺構間接合をする遺物が多量になることが判明し、また出土陶磁器の年代に時期差が認識できなかったため、ＳＫ 18 ～ 20 をもって一体の遺構である地下室跡と考えた。

遺構の規模は全長 7.17m、主要部長 4.65m、幅 1.2 ～ 3.18m、深さ 84㎝（近世確認面から約 1.3m）である。主要部は方形で、北壁に小穴を伴う溝が付設される。近世遺跡で検出される地下室跡・地下室状遺構（以下、地下室跡）と同規模という点では合致するが、地下室跡の形態分類にみられる板壁や柱、天井の有無が確認されず、可能性を指摘するに留まる。ちなみにＬ字形となる平面形態は、中世に長野市域で頻出する竪穴建物跡に類型を求めることができる。文献資料にみられる地下室の利用目的は、防火倉庫・金蔵・麹室・温室など多様であるが、最も一般的なのは防火倉庫で、土蔵よりも安価な防火対策であったとされている（古泉 1990）。

出土した陶磁器は、肥前系では丸碗（25）や五寸皿（30･31）のような大量生産品の比率が高く、それに加えて、肥前系で典型的な火入（35）・花生（15）・小形の瓶（33）が数点含まれる。瀬戸美濃系では陶器碗が比較的出土しているが、太白手のような染付はほとんどみられない。鉢・壺・甕類では瀬戸美濃系が使用されるが、擂鉢は肥前系（26）を主体とする。また 19 世紀前半に出現する産地不明の擂鉢（27）が入っており、遺構の廃棄年代の根拠の一つとした。京信楽系は少量で、杉形碗（1・2）や小杯（3）、徳利などに器種が限定されている。備前焼は長野市内では出土量が極めて少ないが、出土したのは「べこかん徳利」（7）で、備前焼のコピーである美濃焼の腰折形徳利（32）も出土した。

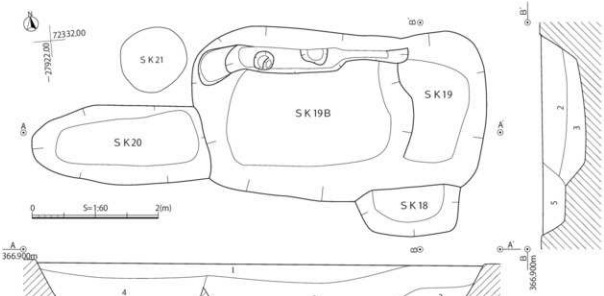
掲載外の陶磁器も合わせ概観すると、幕末期の指標である瀬戸美濃系磁器染付が入らず、18 世紀中葉から 19 世紀初頭と年代幅が比較的狭く、遺物群としてまとまりがある。産地は肥前系が最も多く、次いで瀬戸美濃系で占められ、京信楽系が少量という、該期における北信地域の産地比率と傾向が一致する。また大量生産で安価な製品が大半であることから、所有者を町人層と想定できるが、その中に小杯や大皿、水滴のような器種も少量混在する。

後町遺跡と同一の流通・消費圏にある、元善町遺跡善光寺大本願明照殿建設地点は、善光寺住職を兼務する上人が住持していた。階層としては町人層より上であり、器種組成は多様である。碗は中碗を主とし、天目形や、京焼系がみられ、焜炉や京焼系の涼炉など茶に関する道具からは文人趣味の傾向が窺える。一方、本遺構は小碗・小皿が主体で、器種が限定的であり、出土した漆器椀などと組み合わせた日用の器種組成であったとみられる。

陶磁器以外では土器の内耳鍋（11）がある。長野県域で中世から続く器種で、近世段階には器高が約 6 ㎝と低くなる。瓦では影盛（40）と巴文の軒丸瓦（43）を図示した。燻瓦のため近世後期以降とわかるが、産地や年代は不明である。硯（17）は凝灰岩製で、表面を黒色塗布している。擦痕や線状痕が付いていることから、砥石として２次利用されたとみられる。

この他では種実が出土し、破片以外で同定可能な点数は合計 894 点である。最も多いのは、カボチャとみられるウリ科の種子で、ＳＫ 20 から 681 点、ＳＫ 19 から 16 点、そのほかで 14 点である。モモは 95 点で、このうちＳＫ 19 で 59 点出土した。少量ではあるが、クルミ類 15 点、ウメ 21 点、アンズ 12 点、ウリ科 5 点、ナス科 20 点も確認された。

出土遺物の総量は、近世では、陶磁器 22,358.2g、土器 929.2g、瓦質土器 1,673.8g、瓦 8,579.6g、土製品 268.0g、石製品 943.9g、金属製品 24.7g、ガラス製品 4.1g である。その他、須恵器 8.6g、土師器 2.0g、青磁 4.5g、中世陶器 55.6g、土器皿 1.0g である。出土した木製品・銭貨については別項を設けた。



1. 暗褐色粘土　粘性・しまりあり。礫・炭化物。
2. 黒褐色粘土　粘性やや強、しまりなし。礫・炭化物・遺物多量。
3. 黒褐色粘土　粘性やや強、しまりなし。青灰色シルト混。礫・炭化物・木片・遺物。
4. 黒褐色粘土　粘性・しまり弱。瓦・木片・土器・陶磁器など。
5. 黒褐色粘土　粘性あり、しまりやや弱。木片・陶磁器など。

図20　地下室跡遺構実測図

地下室跡土層堆積状況（南東から）

地下室跡完掘状況（北東から）

（ ）内は残存値・推定形、土器は中近世

遺構名	長軸(m)	短軸(m)	深度(cm)	平面形	断面形	備考
SK18	1.63	(0.78)	41.9	(方形)	台形状	重複器8.65g、陶磁器1,733.6g、土器75.3g土製品9.3g、石製品370.9g、銭貨、木製品
SK19	4.68	2.7	84.0	方形	階段状	北壁に溝状掘方、長約30cm、幅約40cm、深さ約30cm、内部に小穴2基（深さ7cm・12cm）、青磁4.5g中世陶器55.6g、陶磁器16,332.9g、土器834.3g、瓦質土器1,673.8g、近世瓦5,326g、土製品258.7g、石製品573g、金属製品10.5g、ガラス製品4.1g、銭貨、木製品
SK20	2.73	1.26	74.7	楕円形	台形状	土師器2g、土器21.1g、陶磁器689.1g、土器19.6g、近世瓦3,253.6g、金属製品14.2g、木製品

表14　地下室跡遺構観察表

上層

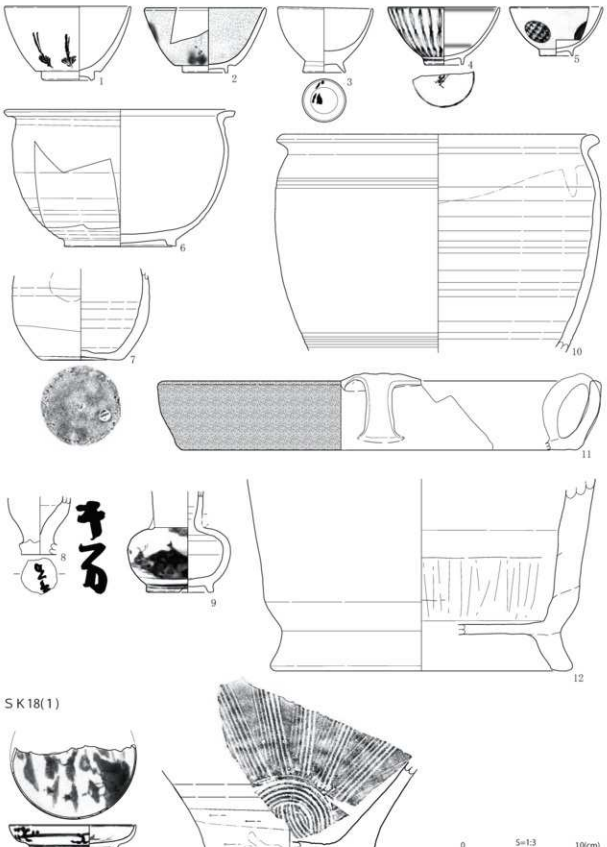


図21　地下室跡出土遺物実測図（1）

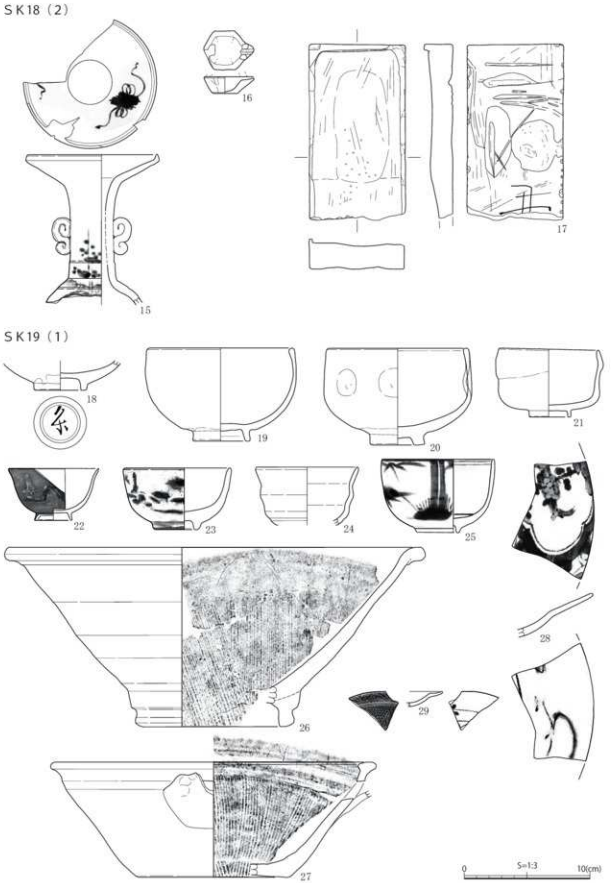


図22　地下室跡出土遺物実測図（2）

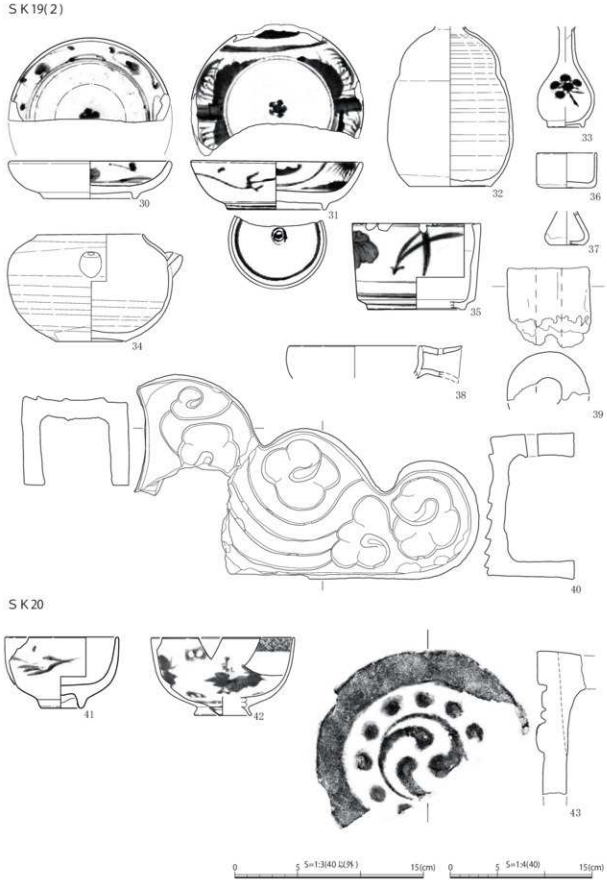


図23　地下室跡出土遺物実測図（3）

( )内は残存値、砂＝砂粒、石＝石英、長＝長石、角＝角閃石、雲＝雲母、赤＝赤色粒、白＝白色粒、黒＝黒色粒

掲載番号	出土位置層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	重量(g)	色調 内/外	胎土	釉薬 (内)/(口)色調	成型の特徴	備考
1	上層(SK18～20)	京信楽系陶器	碗	9.9	3.8	5.9	3/6	75.0	—	灰黄、精良・堅緻	灰釉(灰黄)、鉄絵・兵庫	ロクロ成形、高台無釉、鉄絵若干、先端に兵庫	畿中4期古段階、18C3/4、後葉
2	上層(SK18～20)、SK19上層	京信楽系陶器	碗	9.2	3.6	5.3	3/6	54.9	—	灰黄、精良・堅緻	灰釉(灰白)、鉄絵・兵庫	ロクロ成形、高台無釉、水銀、鉄絵若干、先端に兵庫	畿中4期古段階、18C3/4
3	上層(SK18～20)、SK19底	京信楽系陶器	小杯	7.4	3.2	5.1	4/6	70.1	—	灰白、精良・堅緻	灰釉(灰白)、鉄絵	ロクロ成形、外側面上絵付者・茶色、高台～底無釉	19C小、高台内墨書
4	上層(SK18～20)	肥前系磁器染付	碗	8.8	2.9	4.6	3/6	36.1	—	灰白、精良	透明釉、兵庫	ロクロ成形、畿付無釉、外側面矢羽文描し、口沿縁二重圏線、見込み蛇字文	大橋IV期末～V期初、1770～1780年代
5	上層(SK18～20)、溝19上下層	肥前系磁器染付	碗	7.3	2.6	3.9	4/6	25.1	—	灰白、精良	透明釉(明緑灰)、兵庫	ロクロ成形、畿付無釉、外側面矢文	大橋III期、1680～1700年代
6	上層(SK18～20)、SK18、SK19北・下層・溝上)、2次面	瀬戸系陶器	鉢	18.3	8.7	10.9	3/6	419.7	—	灰白、鐵	灰釉(灰白)	ロクロ成形、外側面～底回転ケズリ、外側面ハ	18C後～19C中
7	上層(SK18～20)	備前	甕	—	6.3	(7.2)	3/6	185.3	—	赤褐、精良、堅緻	若鐵(暗赤褐)	ロクロ成形、外側面～底回転ケズリ、外側面ハ	東国近世初期、18C中～19C前、外底「山」印
8	上層(SK18～20)	美濃陶器	花瓶	—	—	(4.5)	2/6	67.3	—	淡黄、やや粗、石	鉄釉(黒)	ロクロ成形、同転糸切、外底無釉	瀬戸窯II期、18～19C前、外底墨書「平力」
9	上層(SK18～20)、SK18	肥前系磁器染付	花生	—	5.2	(6.0)	別底下3/6	112.2	—	灰白、精良	透明釉(明緑灰)、兵庫(やや濃暗)	ロクロ成形、別底・耳貼付、畿付無釉、山水束図文、高台脇二重圏線	年代不明
10	上層(SK18～20)	瀬戸美濃系陶器	壺	34.2	—	(23.6)	1/6	873.3	—	茂黄褐、やや粗、石・長・小礫	内鉄釉、外鉄釉(暗褐)、外口～胴白色釉(明緑灰)	粘土紐ロクロ成形、平行沈線	藤蔵6～11小期、18C4/4～幕末
11	上層(SK18～20、SK19上層	土器	内耳鍋	34.0	31.3	5.5	1/6	289.7	にぶい褐	粘、砂・角・礫・赤	—	ロクロ成形、耳貼付	在地、近世、外面スス付着
12	上層(SK18～20、SK19底	瓦質土器	火鉢	—	23.0	(15.3)	2/6	1,673.8	灰	粘、雲、石・角・礫	—	輪積痕、ナデ、外ミガキ	産地・不明、内外部大掻き痕
13	SK18	肥前系磁器染付	皿	10.0	6.8	2.1	3/6	45.2	—	灰白、精良・やや密	透明釉、兵庫(やや濃)	ロクロ成形、畿付無釉、外側面如意頭文描れ唐草文、高台脇二重圏線、内口縁圏線、見込ダミ蛇用山水束図文	大橋IV期、1690～1730年代
14	SK18	陶器	擂鉢	—	13.0	(6.8)	底部1/3	390.8	—	橙、長・礫多	鉄釉(黒褐)	成形不明、ロクロ整形、同転糸切、体下同転ケズリ、胴目1単位10条で太く やや密、見込胴目円状、外体下～底無釉	産地・年代不明
15	SK18	肥前系磁器染付	花生	10.3	—	(12.0)	口～胴4/6	209.4	—	灰白、精良	半透明釉、兵庫(やや濃)	ロクロ成形、別底・耳貼付、外～別底内施釉、型口縁、別底～胴松竹梅文・強文、口縁内宝文	年代不明
16	SK18	陶器	ミニチュア	3.9	2.0	1.3	把手欠	9.3	—	淡黄	灰釉(灰オリーブ)	把手付鍋子、押型成形か、把手貼付、内～口縁上施釉	産地・年代不明、玩物
17	SK18	石製品	硯	長(13.8)	幅7.6	最大厚2.3 最小厚1.6	海部欠	370.9	暗灰	—	—	凝灰岩、黒色顔料塗布	底面線刻、磨痕・無底、硯石に二次利用
18	SK19底	肥前系陶器	碗	—	4.0	(2.3)	底部6/6	63.3	—	灰白、精良・堅緻	灰釉(浅黄)	ロクロ成形、高台無釉	大橋IV期、1680～1700年代、高台内墨書「ケ?」
19	SK19上層	瀬戸系陶器	碗	11.2	4.5	7.4	4/6	164.7	—	灰白、粗	灰釉(浅黄)	ロクロ成形、高台底部を除き無釉	藤蔵8小期、18C4/4
20	SK19	美濃陶器	碗	10.8	4.2	7.7	3/6	161.1	—	灰白、やや粗・堅緻、砂・礫	鉄釉(黒)、長石釉(白)	ロクロ成形、外側面回ヘラ、外体下部～高台無釉、高台内施釉	瀬戸窯I期、1730～1750年代
21	SK19下層	瀬戸美濃系陶器	碗	7.8	3.2	5.4	5/6	119.5	—	灰白、精良	内～口縁外灰釉(灰白～暗)、外鉄釉	ロクロ成形、畿付無釉、灰釉鉄釉掛け分け痕	18C4/4～19C前
22	SK19上下層	美濃陶器	碗	7.1	3.9	4.6	4/6	37.8	—	灰白、精良・堅緻	内灰釉、外鉄釉(暗赤褐)、外側面鉄絵・ラの字模様で文様	ロクロ成形、畿付無釉、灰釉鉄釉掛け分け痕	瀬戸II期、1770～1840年代
23	SK19上層、SK19底	陶器	碗	8.3	3.4	4.9	4/6	151.8	—	灰、精良	白化粧、灰釉(灰オリーブ)、外側面鉄絵	ロクロ成形、畿付無釉	産地不明、18C後～19C前
24	SK19底、SK20	陶器	碗	8.0	—	(4.6)	2/6	31.3	—	灰、やや密	白化粧、灰釉(オリーブ灰)	ロクロ成形、沈線	産地不明、19C前
25	SK19底	肥前系磁器染付	碗	8.7	3.2	5.8	2/6	39.2	—	灰白、精良	透明釉、兵庫(暗緑)	ロクロ成形、外側面圏線・荒跡ら強文、内口縁二重圏線、見込圏線、畿付無釉	大橋IV期、1770～1810年代
26	SK19上下層	肥前系陶器	擂鉢	32.8	11.4	14.3	1/6	382.8	—	橙、砂・礫	鉄釉(暗灰)	ロクロ成形、体下手縦ケズリ、口縁折返し、胴目1単位20条太 端ナデ強え	相田I～C、18C後～19C前
27	SK19上下層	陶器	擂鉢	25.4	12.0	9.7	2/6	432.1	—	にぶい橙、やや粗、長・礫	鉄釉(暗赤褐)	体外ロクロケズリ、口縁下ロクロナデ、首以切立き取り、口縁折返し、胴目1単位10条以上で密、上端ナデ強え、全面施釉	産地不明、18C末～幕末
28	SK19下層	肥前系磁器染付	皿	27.0	—	(3.5)	1/6	49.3	—	灰白、精良	透明釉、兵庫	成形不明、内側面芙蓉手、外側面唐草文	年代不明、後葉
29	SK19	肥前系磁器染付	皿	(12.0)	—	(1.2)	1/6以下	4.2	—	灰白、精良	内端鉄釉、外透明釉・兵庫	型打成形・ロクロ整形	18C後半
30	SK19上層	肥前系磁器染付	皿	12.5	7.4	3.0	3/6	127.9	—	灰白、精良・堅緻	透明釉・灰白、兵庫(暗)	ロクロ成形、見込貼付輪剥ぎ、畿付無釉、砂付痕、見込剥ぎ痕ホ年石、内側面梅唐草文	波佐見V-2・3期、1750～1810年代

表15　地下室跡遺物観察表（1）

( )内は残存値、砂＝砂粒、石＝石英、長＝長石、角＝角閃石、雲＝雲母、赤＝赤色粒、白＝白色粒、黑＝黑色粒

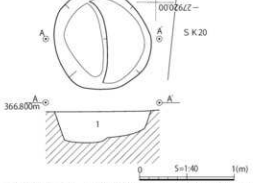
掲載番号	出土位置 層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	重量(g)	色調 内/外	胎土	釉薬 ( )内は色調	成整形の特徴	備考
31	SK19B	肥前系磁器染付	皿	13.3	7.8	3.9	3/6	202.1	—	灰白(やや暗)	透明釉(明緑灰)、呉須(暗青灰)	ロクロ成形、畳付無釉、高台内「福」銘、見込み印刑五弁花外側面線描唐草文	波佐見Ⅵ-2～4期、1750～1820年代
32	SK19上層	瀬戸美濃系陶器	瓶	—	6.5	(14.7)	3/6	136.7	—	灰白、砂・礫	鉄釉(灰褐)	ロクロ成形、体下半ロクロケズリ、底部回転ケズリ、口縁内～外底部付近施釉	18C中～19C前
33	SK19下層	肥前系磁器染付	瓶	—	2.8	(8.0)	5/6	40.9	—	灰白、精良	透明釉、呉須(やや暗)	ロクロ成形、畳付無釉で砂付痕、外・口縁内施釉、外側面強・梅文	大橋Ⅴ期、18C中～19C
34	SK19、SK19下層	陶器	不明	8.4	5.6	8.5	5/6	261.7	—	灰白、やや堅緻、砂	鐵・鉄釉・(褐)	ロクロ成形、外体下端～底回転ケズリ、外体・内施釉、注口貼付	産地・年代不明、外底スス付着
35	SK19上層	肥前系磁器染付	火入	10.2	7.7	6.8	2/6	89.1	—	灰白、精良・堅緻	透明釉(灰白)、呉須(濃暗)	ロクロ成形、蛇の目凹形高台、外側面線描草文	波佐見Ⅴ2・3期、1750～1810年代、口唇部蛇行痕
36	SK19B	瀬戸美濃系陶器	鉢猪口	4.6	3.5	2.8	4/6	31.1	—	灰黄、やや粗・硬	灰釉(灰白)	ロクロ成形、回転糸切、外底無釉	18C中～幕末
37	SK19下層	陶器	ミニチュア	—	2.6	(2.7)	3/6	13.0	—	黄灰、密・堅緻	灰釉(灰白)	板、ロクロ成形、回転糸切、外底・内無釉	産地不明、18C～
38	SK19	土器	不明	(10.5)	把手長3.0	(2.6)	1/6以下	22.3	にぶい黄橙	精良堅緻、砂・石・赤	—	ロクロ成形・把手貼付・把手上面に穿孔	産地・年代不明、外面スス付着
39	SK19上層	土製品	羽口	外径6.5	孔径2.3	長(6.4)	—	128.0	にぶい黄橙	粗、砂・礫・植物片	—	成整形痕跡不明瞭、指圧痕、型成形か	産地・年代不明
40	SK19下層	瓦	影響	縦(19.3)	横(26.4)	幅9.4	—	2,845.7	灰	—	—	外花文貼付、内外ヘラ調整	産地不明、19C～
41	SK20下層	陶器	碗	8.9	3.0	5.7	3/6	88.5	—	明灰、密	白化粧、灰釉(灰オリーブ)、外側面鉄絵	ロクロ成形、畳付無釉、砂付着	産地不明、18C後～19C前
42	SK20欠土・下層	肥前系磁器染付	碗	11.3	4.4	6.2	2/6	47.8	—	灰白、精良	透明釉、呉須(やや濃暗)	ロクロ成形、畳付無釉、外側面連草文・京花文、ダミ、内口縁四方雅文、見込み二重圏線	大橋醇期、1770～1780年代
43	SK20上層	瓦	丸瓦	長(5.8)	瓦当径17.0	厚2.0	瓦当	673.7	—	灰、軟・やや粗、長・礫	—	瓦当型成形、瓦当・瓦接合、瓦当内面布目痕、連珠三巴文、連珠圏線刻	産地不明、19C代

表 16　地下室跡遺物観察表（2）

ＳＫ 21

地下室跡の北西に近接して位置する。平面は円形で、直径 1.04m、深さ 33.2㎝の階段状を呈する。覆土は若干しまりがない黒褐色土で、礫を含む。出土遺物は肥前系磁器染付の筒丸碗や皿・鉢・瓶、京信楽系・瀬戸美濃系の碗が出土したが、産地不明な製品も比較的多く、土鍋がみられるなど 19 世紀前葉から中葉の特徴を示す。遺物の総量は陶磁器 851.8g、瓦質土器 195.6g、近世の瓦 148.8g である。

ＳＫ 21 土層堆積状況（北から）



1. 黒褐色粘土　粘性・しまりややあり。礫。底部付近地山ブロック混。

図 24　ＳＫ 21 遺構実測図

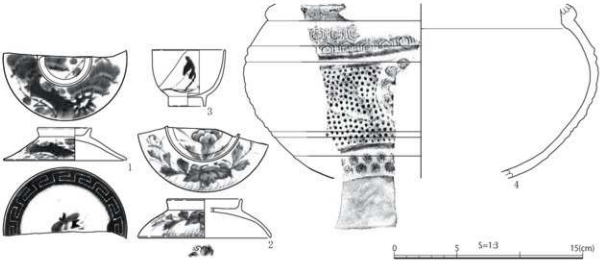


図25　ＳＫ21出土遺物実測図

（ ）内は残存値、砂－砂粒、石－石英、長－長石、角－角閃石、雲－雲母、赤－赤色粒、白－白色粒、黒－黒色粒

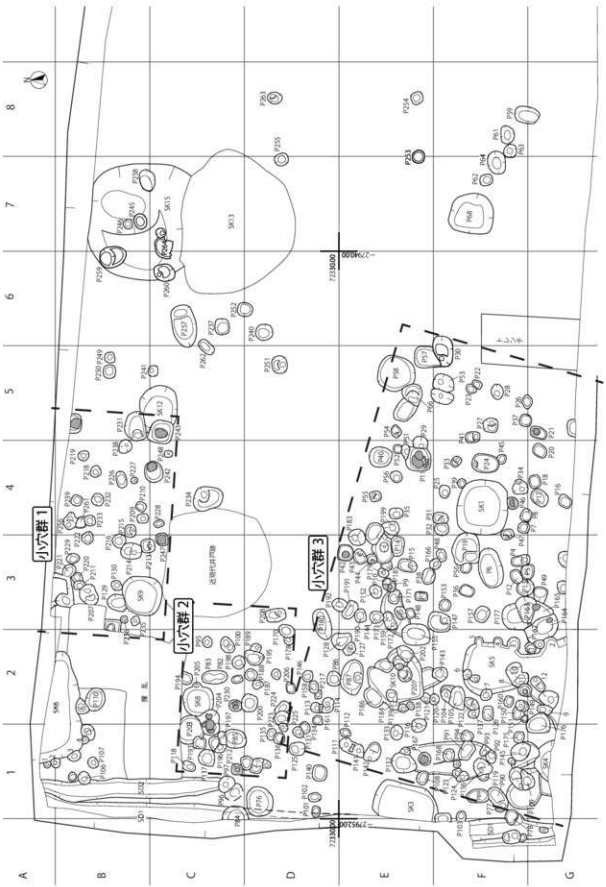
図版番号	出土位置 層位	種類	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	残存率	重量(g)	色調 内/外	胎土 （ ）内は色調	釉薬	成整形の特徴	備考
1	覆土,第20上層	肥前系磁器染付	碗蓋	9.8	鋸み径4.3	2.6	3/6	37.5	—	灰白,精良	透明釉,呉須(濃)	ロクロ成形,蛇目高台,外面竹節線,内口縁ダミ地白抜き雷文,見込海老絵	大橋Ⅴ期,19C前半～幕末
2	覆土	肥前系磁器染付	碗蓋	10.5	鋸み径5.9	3.1	3/6	36.7	—	灰白,精良	透明釉,呉須(明)	ロクロ成形,蛇目無釉,鋸歯状文様,外弦花文,見込手描文様	大橋Ⅴ期,19C前半～幕末,玉鋸手様
3	覆土	京信楽系陶器	鉢	5.7	3.0	4.5	3/6	26.3	—	灰白,精良・やや砂帆	灰釉(灰白～淡黄),鉄絵	ロクロ成形,外伏下～底無釉,外側面草花文	信中5期古段階,19C中
4	覆土	瓦質土器	風炉	—	—	(13.8)	1/6	183.0	黒	灰白,精良,長・白	—	成形不明,内ロクロ整形,外ミガキ,凸帯による区画,亀甲文・貼花文・竹管文,鋲子文貼付	産地・年代不明

表17　ＳＫ21遺物観察表

小穴

小穴は245基検出し、近世に属する６基を除く239基を中世の遺構と判断した。中世遺構分布図（図26）に２ｍ角のグリッドを図示し、小穴遺構観察表に遺構の位置をグリッドで表記した。遺構観察表の覆土は、Ａ－２次面包含層土（黒褐色粘土）、Ｂ－２次面包含層土・地山ブロック・炭化物の混成、Ｃ－灰色粘土、Ｄ－暗灰色粘土、に分類した。遺構はＣ→Ｂ→Ａ→Ｄの順で新しくなると判断し、Ａ～Ｃは中世、Ｄは近世以降と考えている。小穴の平面形は方形の割合が高く、断面がＵ字状のものは深い傾向があり、このほか柱痕があるもの、根固め石を持つものがある。階段状の小穴は、上段の掘方に対し下段の平面位置が壁際に偏る場合が多く、Ｐ15のように柱痕を残す例がある。これらの特徴を有する小穴を柱穴であると判断し、その分布を基準として、中世遺構分布図（図26）では、建物の建替えが重複する範囲を小穴群として示した。小穴群１・２がＳＤ１・２と並行するように位置するのに対し、小穴群３は軸方位が異なるため、両者に時期差が存在する可能性がある。

図示した遺物は珠洲焼片口鉢と在地の須恵質擂鉢である。いずれも14世紀前半から半ばのものと考えられ、調査区の中世で主要な時期に当たる。Ｐ91の１は、長野市域で普遍的に確認されるロクロ成形の土器皿である。小穴の大部分は遺物が乏しいが、覆土が２次面包含層土であることから時期を特定した。局所的な整地を除けば、２次面包含層は13世紀から15世紀にかけて、14世紀を主体とする時期に形成されている。小穴の埋没時期も同様であると想定し、異なる覆土についても出土遺物から中世であることが確認された。この埋没時期は、善光寺門前町跡・西町遺跡で検出された区画溝跡と同時期である。


小穴群 1
小穴群 2
小穴群 3
SK13
SK15
SK12
SK1
SK3
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SD16
SD17
SD18
SD19
SD20
SD21
SD22
SD23
SD24
SD25
SD26
SD27
SD28
SD29
SD30
SD31
SD32
SD33
SD34
SD35
SD36
SD37
SD38
SD39
SD40

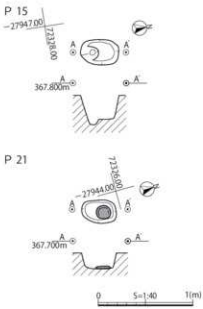
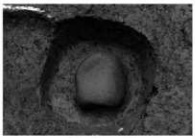
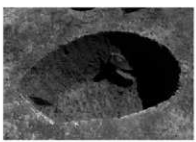


図 27　小穴遺構実測図

P 15 土層堆積状況（東から）



P 243 完掘状況（北から）



P 6 遺物出土状況（北から）

P 166 遺物出土状況（北東から）

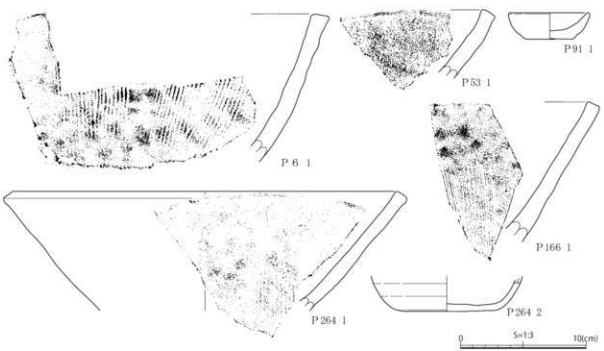


図 28　小穴出土遺物実測図

（）内は残存値，砂－砂粒，石－石英，長－長石，角－角閃石，雲－雲母，赤－赤色粒，白－白色粒，黑－黑色粒

遺構名	掲載番号	出土位置 層	出土位置 位	種類	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 底径	法量 (cm) 器高	残存率	重量 (g)	色調 内/外	胎土	成整形の特徴	備考
P6	1	覆土		須恵	片口鉢	—	—	(12.4)	1/6	311.1	にぶい黄	緻密，石・長・海綿骨針・小礫	ロクロ成形，外体下部圧痕，内部目1単位12条	吉岡IV期，14C1/4～3/4，使用痕，被熱，ヒトリスス付着，赤化
P53	1	覆土		須恵	片口鉢	24.2	—	(5.4)	1/6	81.3	灰	精良，石・長・黑	ロクロ成形，内部目単位不明	吉岡IV期，14C1/4～3/4
P91	1	覆土		土器	甕	6.2	3.2	2.1	5/6	41.0	浅黄橙	石・長・雲・赤	ロクロ成形，回転糸切	—
P166	1	覆土		中世 須恵器	瓶類	(20.8)	—	(17.0)	1/6	144.1	灰	精良，長・小礫	外面毛・ナデ調整，内部目1単位10条	在地，赤川期，14C前～中
P264	1	覆土	上部	須恵	片口鉢	30.4	—	(9.5)	1/6	226.3	灰	石・長・黑	ロクロ成形，部目1単位10条	吉岡IV期，14C1/4～3/4，使用痕
P264	2	覆土	上部	土器	皿	—	8.0	(2.8)	1/6	27.4	にぶい黄橙	石・雲・赤	ロクロ成形，回転糸切	被熱

表 18　小穴遺物観察表

遺構名	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深度	平面形	断面形	種土	備考
P1	E2	32	26	13.3	方形	台形状	A	近世, 1次面遺構
P2	E2	37	23	57.0	方形	U字状	A	近世, 1次面遺構
P3	D3	27	19	16.5	方形	台形状	B	
P4	E3	41	23	28.9	円形	U字状	B	
P5	E・F3	32	29	15.6	楕円形	U字状	B	
P6	E3	84	51	29.7	楕円形	平行状	B	14世紀, 珠洲壺片口鉢, 風炉
P7	E・F4	26	23	14.8	円形	台形状	B	中世, 土器内耳鍋
P8	E・F4	29	27	21.5	方形	U字状	A	
P9	D3	24	18	15.9	方形	階段状	A	
P10	D3	23	17	21.5	方形	階段状	A	
P11	D4	54	47	26.1	方形	台形状	C	底面穴
P12	E3	31	24	10.0	方形	台形状	B	
P13	E・F3	37	37	18.5	円形	擂鉢状	B	中世, ロクロ成形土器底
P14	D3	43	27	25.8	方形	台形状	A	
P15	D3	41	27	31.4	楕円形	階段状	B	柱痕
P16	F4	31	24	12.9	方形	台形状	A	
P17	F4	46	31	23.1	方形	U字状	A	
P18	E4	27	25	9.4	方形	台形状	A	中世, 古瀬戸陶器片, 土器底
P19	E3	64	58	52.5	方形	階段状	B	弥生土器, 土師器
P20	F4	33	25	19.5	方形	台形状	A	土師器
P21	E5	36	24	16.5	方形	台形状	A	底面穴
P22	E5	22	17	10.0	方形	台形状	C	
P23	E5	23	18	13.7	円形	台形状	A	
P24	E4	47	40	26.2	楕円形	階段状	B	
P25	E4	28	23	40.5	方形	U字状	B	
P26	E・F5	29	23	18.5	方形	台形状	B	
P27	E5	31	31	25.3	方形	階段状	B	
P28	E5	33	26	30.1	円形	U字状	B	
P29	D4・5	32	26	33.9	方形	U字状	B	
P30	E5・6	65	41	41.3	方形	階段状	C	中世, 土器底
P31	E4	32	24	15.5	方形	階段状	B	
P32	E4	35	31	13.1	方形	台形状	A	
P33	E4	24	20	16.8	方形	階段状	B	
P34	E4	32	31	29.3	方形	階段状	B	別の小穴と重複
P35	D4	30	23	31.9	方形	U字状	B	
P36	E3	31	27	29.3	方形	U字状	B	土師器
P37	E・F5	26	26	19.9	方形	台形状	B	
P38	D・E5	34	27	12.4	楕円形	台形状	B	
P39	E4	19	16	14.8	円形	U字状	B	
P40	D4	48	43	52.9	方形	台形状	A	土器底, 陶器, 黒曜石
P41	E4・5	31	23	14.8	方形	階段状	B	
P42	D3	34	33	11.3	方形	台形状	B	底面穴
P43	D3	33	27	12.6	方形	階段状	B	
P44	D3	22	21	24.0	方形	階段状	B	
P45	E4	21	20	10.6	方形	台形状	B	
P46	E4	27	24	7.7	方形	台形状	B	底面穴
P47	E3・4	29	23	11.5	方形	階段状	B	底面穴
P48	E3	27	20	15.8	楕円形	台形状	B	
P49	F3	32	25	16.7	楕円形	台形状	B	
P50	E3	24	22	34.5	方形	U字状	B	
P51	D4	35	18	22.1	方形	U字状	A	
P52	D4	18	16	13.1	方形	台形状	A	
P53	E5	44	36	25.0	楕円形	台形状	B	14世紀, 珠洲捷片口鉢
P54	D5	24	22	13.7	方形	階段状	B	
P55	D4	25	21	23.5	方形	階段状	A	黒曜石
P56	D4	25	24	33.0	円形	台形状	A	
P57	D・E5	56	45	28.4	方形	U字状	C	底面穴, 土師器
P58	D5	81	75	27.8	円形	台形状	C	
P59	E・F5	51	35	6.8	楕円形	弧状	B	
P60	F9	25	23	7.8	円形	台形状	A	近世
P61	E8	39	29	9.1	楕円形	弧状	B	
P62	E7	28	23	25.2	方形	U字状	B	
P63	E8	28	27	31.0	円形	U字状	B	
P64	E7・8	48	40	25.2	楕円形	台形状	B	
P65	D8・9	99	87	47.3	方形	台形状	D	近世以降
P66	D5	87	44	30.9	楕円形	台形状	C	
P67	F7・8	123	97	41.4	方形	台形状	—	<SK14, 近世, 陶器, 土器底, 瓦
P68	E7	90	86	50.2	方形	台形状	—	中世, ロクロ成形土器底
P69	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P70	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P71	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P72	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P73	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P74	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P75	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P76	E1	63	51	13.4	円形	台形状	A	
P77	E1	33	21	15.5	楕円形	台形状	B	
P78	E1	23	22	28.1	楕円形	台形状	B	
P79	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P80	F2	32	17	20.0	楕円形	U字状	B	柱痕, SK59Pに変更, 土器内耳鍋
P81	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P82	B2	28	25	11.7	円形	階段状	C	中世, 土器内耳鍋
P83	B2	28	26	12.7	円形	台形状	C	
P84	B1	48	30	23.8	方形	台形状	B	
P85	B1	43	40	21.3	円形	U字状	B	

A～D-底色含種土, B～2次面包含種土・地山ブロック・炭化物の混成, C～灰色粘土, D～暗灰色粘土, A～C-中世, D-近世以降(()内は推定形

遺構名	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深度	平面形	断面形	種土	備考
P86	E・D2	31	27	29.0	円形	擂鉢状	B	
P87	B2	74	48	37.9	楕円形	階段状	A	
P88	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P89	E1	46	27	6.1	楕円形	弧状	B	
P90	E1	33	33	13.8	楕円形	台形状	B	中世, ロクロ成形土器底
P91	E1	41	27	17.2	楕円形	台形状	B	中世, ロクロ成形土器底
P92	E1	24	21	14.5	方形	台形状	B	13世紀用, 珠洲壺片口鉢
P93	E1	24	16	15.3	方形	台形状	B	土師器
P94	E1	26	23	12.0	方形	台形状	B	中世, ロクロ成形土器底
P95	B2	22	21	21.2	方形	台形状	B	土師器
P96	B1	40	24	17.8	円形	台形状	B	
P97	B1	39	30	17.0	円形	台形状	A	
P98	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P99	—	欠番	—	—	—	—	—	—
P100	B2	36	27	15.9	楕円形	階段状	A	
P101	C1	26	17	26.7	楕円形	U字状	B	
P102	C1	27	17	21.2	楕円形	U字状	B	
P103	E1	21	19	23.9	円形	U字状	B	
P104	E2	34	21	17.8	楕円形	階段状	B	中世, ロクロ成形土器底
P105	E2	49	30	26.3	楕円形	台形状	B	
P106	A1	28	26	33.7	円形	U字状	B	
P107	A1	25	20	25.3	円形	U字状	B	
P108	B1	30	24	7.3	円形	台形状	A	
P109	E・F1	59	40	56.8	楕円形	U字状	B	柱痕, 中世陶器壺片, 瓦
P110	A2	49	41	16.9	楕円形	台形状	C	
P111	B1	30	26	23.0	円形	台形状	B	
P112	B1	29	18	12.2	方形	台形状	B	
P113	C2	21	21	16.8	円形	台形状	B	
P114	C2	25	20	18.9	双円形	階段状	B	
P115	B2・3	58	45	29.2	(円形)	階段状	B	近世, 陶器片, 土器底
P116	B1・2	30	28	22.5	方形	U字状	B	縄土中位に縄平編
P117	B1	25	24	27.2	方形	U字状	B	
P118	B1	28	20	35.3	方形	U字状	B	
P119	E2	24	13	11.9	(円形)	台形状	B	
P120	D・E2	22	20	18.3	円形	台形状	B	
P121	D2	22	20	6.6	円形	弧状	B	
P122	E2	32	24	27.3	楕円形	階段状	B	13世紀用, 珠洲捷片口鉢, 土器底
P123	E1	21	18	20.2	(円形)	U字状	B	<P124
P124	E1	27	16	22.0	円形	U字状	B	>P123
P125	C2	35	29	50.6	方形	U字状	A	不明金属製品
P126	C2	30	24	6.3	方形	弧状	—	
P127	B2	31	22	31.9	方形	階段状	C	<P128
P128	C・D2	44	34	33.6	楕円形	台形状	B	>P127
P129	A3	39	24	7.3	円形	弧状	A	
P130	A3	23	21	15.8	方形	U字状	A	
P131	C1	27	20	19.7	楕円形	U字状	A	
P132	B1	57	55	43.8	円形	台形状	B	中世, 土器底, 土器内耳鍋
P133	B1	31	23	15.9	円形	台形状	B	
P134	C1・2	25	18	4.9	円形	弧状	A	
P135	C1	26	18	13.5	楕円形	台形状	A	>P136
P136	C1	28	24	9.2	円形	台形状	B	<P135
P137	E2	22	18	18.0	方形	U字状	A	
P138	D2	19	17	13.9	楕円形	U字状	B	
P139	D2	20	18	12.0	方形	階段状	B	
P140	C1	35	31	8.9	方形	台形状	B	
P141	B1	26	26	7.6	円形	台形状	B	
P142	D2	42	40	19.7	楕円形	階段状	B	
P143	D2	32	28	39.4	円形	台形状	B	
P144	D3	28	23	49.2	楕円形	U字状	B	
P145	E1	44	34	44.6	円形	U字状	B	14世紀, ロクロ成形土器底, 高麗瓶
P146	C2	22	22	24.6	方形	U字状	B	中世, ロクロ成形土器底
P147	D・E3	46	43	40.0	方形	階段状	B	柱痕, 上段柱痕墓に円鍋
P148	D3	21	19	11.0	方形	台形状	A	
P149	F2	29	23	27.5	楕円形	階段状	B	
P150	E2	26	20	17.6	楕円形	U字状	B	
P151	E2	16	14	17.7	円形	階段状	B	
P152	D3	28	24	33.8	円形	U字状	B	
P153	C3	26	24	11.8	円形	台形状	C	
P154	E2	24	23	29.3	円形	U字状	B	SK97に変更
P155	D・E3	59	46	43.3	方形	台形状	B	柱痕
P156	E1	37	34	67.2	楕円形	階段状	B	土器小片
P157	E3	35	32	42.9	楕円形	U字状	B	
P158	C2	24	19	23.9	方形	U字状	B	
P159	D3	24	20	32.5	円形	U字状	B	土器小片
P160	E2	22	20	30.6	方形	U字状	A	
P161	C2	20	20	16.4	方形	U字状	A	
P162	(E,F)・2	77	24	47.0	—	U字状	B	
P163	E・F3	65	36	37.2	—	U字状	A	底面付近縄平円鍋, 中世, ロクロ成形土器底
P164	F3	77	24	47.0	—	U字状	B	底面縄平円鍋
P165	F3	51	20	24.2	—	台形状	B	底面円鍋, 中世, ロクロ成形土器底

表19　小穴遺構観察表（1）

A－2次面包含層土，B－2次面包含層土・地山ブロック・焼化物の混成，C－灰色粘土，D－暗灰色粘土，A～C－中世，D－近世以降（）内は推定形

遺構名	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深度	平面形	断面形	層土	備考
P249	A5	23	21	14.3	方形	台形状	B	
P250	A5	29	26	9.8	方形	台形状	B	
P251	C5	36	30	9.5	円形	隅袋状	B	柱痕（黒褐色粘土），中世，ロクロ成形土器盃
P252	B・C6	33	22	10.4	円形	台形状	B	層土中扁平礫
P253	D7	28	26	15.5	円形	半円状	B	
P254	D6	28	17	9.2	方形	台形状	B	
P255	C7・8	28	28	—	円形	台形状	C	柱痕
P256	A4	28	28	—	方形	隅袋状	B	柱痕（黒褐色粘土）
P257	D6	91	52	62.8	楕円形	隅袋状	B	中世，ロクロ成形土器盃
P258	A・B5	48	33	—	円形	U字状	B	＞SK15
P259	A6	59	44	11.0	楕円形	隅袋状	B	＞SK15，中世，龍泉窯系青磁碗，土器盃，土器内耳鍋
P260	B6	43	39	27.0	方形	隅袋状	B	＞SK15
P261	A4	22	18	12.0	方形	台形状	B	
P262	B5・6	38	20	—	楕円形	台形状	C	
P263	C8	32	25	23.0	円形	隅袋状	B	
P264	B6・7	40	39	31.0	円形	台形状	A	＞SK15，14世紀，珠洲壺片口鉢，ロクロ成形土器盃，古瀬戸陶器片

遺構名	グリッド	規模(cm) 長軸	短軸	深度	平面形	断面形	層土	備考
P166	D・E2	26	23	13.2	円形	半円状	B	14世紀，瓦質擂鉢
P167	D1	26	24	8.8	円形	台形状	C	層土に礫
P168	E1	28	23	22.3	円形	U字状	B	
P169	E2	21	19	49.1	円形	U字状	B	SK596に変更
P170	C2・3	37	23	42.5	円形	U字状	A	中世，ロクロ成形土器盃，土師器片
P171	D3	31	23	23.5	円形	U字状	B	
P172	D3	27	23	19.2	円形	隅袋状	B	
P173	D3	24	22	14.8	円形	U字状	C	
P174	C・E2	35	26	44.7	円形	隅袋状	A	SK596に変更
P175	E1	24	22	42.0	方形	U字状	—	
P176	F1・2	51	44	25.2	楕円形	台形状	—	
P177	D3	39	37	25.9	円形	台形状	B	
P178	C2	18	16	21.5	円形	U字状	A	
P179	D3	22	22	20.8	円形	U字状	A	
P180	C2・3	68	36	43.1	楕円形	台形状	B	中世，ロクロ成形土器盃
P181	E2	37	32	34.1	円形	U字状	A	SK596に変更
P182	E2	38	24	25.3	円形	U字状	B	SK591に変更
P183	D3・4	36	34	31.3	円形	隅袋状	B	中世，ロクロ成形土器盃
P184	D2	23	17	34.8	円形	U字状	A	
P185	D3	24	18	19.7	円形	隅袋状	B	中世，龍泉窯系青磁碗
P186	D2	46	33	18.1	楕円形	舟状	B	
P187	C2	23	19	16.3	楕円形	台形状	A	
P188	C2	28	26	12.4	円形	台形状	A	
P189	C2	22	18	10.6	円形	台形状	A	
P190	D3	28	25	15.0	方形	台形状	B	
P191	D3	42	22	14.9	楕円形	台形状	A	中世，土器内耳鍋
P192	C・D3	31	28	35.3	方形	U字状	A	
P193	E1	27	25	21.7	方形	U字状	B	
P194	D2	26	22	9.3	楕円形	台形状	C	
P195	C2	40	30	18.9	不整形	隅袋状	—	
P196	E1	38	34	17.0	方形	台形状	A	
P197	E1	28	18	16.8	—	台形状	B	
P198	D2	28	27	25.6	円形	U字状	B	
P199	D4	35	24	33.6	円形	隅袋状	B	
P200	B・C2	38	34	25.9	円形	U字状	B	
P201	D2	22	20	12.8	円形	隅袋状	B	＞SK10
P202	D2	34	35	26.9	楕円形	U字状	A	中世，土器盃，＞SK10
P203	B1・2	60	50	12.9	円形	台形状	—	中世，土器盃
P204	B1・2	46	38	20.7	楕円形	台形状	—	底面礫，＞SK8
P205	B2	20	16	16.0	円形	台形状	—	＜SK8
P206	C2	23	19	9.5	方形	台形状	A	
P207	A3	44	35	26.3	楕円形	隅袋状	B	
P208	C3	42	27	32.0	方形	隅袋状	A	縄文期，13世紀，龍泉窯青磁碗
P209	A4	24	20	51.7	方形	U字状	B	柱痕
P210	A4	24	21	17.2	方形	半円状	A	
P211	A3	22	20	21.6	方形	U字状	A	
P212	B1	25	23	21.5	方形	隅袋状	C	柱痕（黒褐色粘土）
P213	A・B3	30	30	26.3	方形	隅袋状	A	
P214	A3	44	35	48.8	楕円形	隅袋状	A	
P215	A4	26	24	21.8	方形	隅袋状	A	
P216	A3	29	28	13.3	円形	台形状	A	
P217	C2	22	16	—	方形	隅袋状	B	柱痕（黒褐色粘土）
P218	A4	22	20	7.8	円形	半円状	C	
P219	A4	23	21	11.1	円形	台形状	A	
P220	A3	21	18	14.6	—	U字状	C	
P221	A3	26	26	11.4	楕円形	U字状	C	
P222	A3・4	24	24	21.9	方形	U字状	A	
P223	C2	23	27	36.9	円形	U字状	A	中世，陶器片
P224	C2	24	20	15.6	方形	台形状	A	
P225	C1	19	18	49.2	円形	U字状	A	
P226	A4	32	23	13.7	楕円形	台形状	C	
P227	A4	17	15	16.3	円形	U字状	C	
P228	B4	21	17	12.1	楕円形	U字状	A	
P229	A3	27	21	17.9	楕円形	U字状	A	
P230	B2	27	24	16.4	方形	U字状	B	底面扁平礫
P231	C5	61	45	31.8	楕円形	隅袋状	B	＞SK12，中世，古瀬戸
P232	A4	25	23	15.0	円形	U字状	B	
P233	A4	23	22	24.1	円形	U字状	B	
P234	B4	60	50	33.2	楕円形	隅袋状	B，A	2層
P235	A3	19	18	26.9	方形	U字状	—	
P236	A3	16	16	6.5	方形	台形状	—	
P237	B6	31	30	13.5	方形	台形状	A	
P238	A4	33	28	28.3	楕円形	隅袋状	B	
P239	A4	24	24	15.0	方形	U字状	A	
P240	C6	30	28	13.5	円形	台形状	B	
P241	B5	25	22	26.7	方形	隅袋状	B	
P242	A・B4	42	39	10.5	円形	台形状	B	小礫上に扁平円礫配置
P243	B5	49	48	12.5	方形	台形状	—	底面扁平礫，中世，ロクロ成形土器盃，＞SK12
P244	F2	37	22	19.2	楕円形	隅袋状	B	SK591に変更
P245	A7	37	25	14.5	円形	台形状	B	＞SK15，柱痕
P246	A7	21	20	6.0	円形	半円状	B	＞SK15
P247	B3	26	25	13.4	方形	U字状	C	底面扁平礫
P248	B4	18	14	16.1	方形	半円状	B	

表 20　小穴遺構観察表（2）

木製品

木製品はすべてが地下室跡から出土し、多くはＳＫ 19 に属する。調査時に、Ｗ１～ 80 までの番号を付した。取上げの際に１点ごとに番号を付与するよう努めたが、一つの番号に複数の木製品が含まれている場合もあるため、木製品観察表には番号ごとに点数を記載した。この中から抽出したＷ５・17・18・23・26・44・47・51・55・57・67、合計 19 点について、保存処理・樹種同定を行った。保存処理はクリーニングの後、脱鉄・脱色などの処理を行い、処理方法は樹脂含浸・真空凍結乾燥法を選択した。

木製品は漆器とその他がみられるが、漆器では椀・箸・皿などが７点、器種不明は６点である。下駄は破片も含め 18 点あり、差歯下駄８点、このうち黒漆塗が２点である。刳り抜き下駄は３点で、黒漆塗２点を含む。種類不明の下駄は７点で、黒漆塗１点を含む。曲物・樽などとみられる容器の底板は大小 11 点出土し、木栓も５点出土した。箸は９点と破片などが出土した。木簡はＳＫ 19 から出土し、札状で墨痕が表面に確認されたが、釈読はできなかった。Ｗ 69・70 は風呂鐵の台部で柄は欠損している。

樹種については（第３章）、下駄はＷ 18・44・55 では堅硬な樹種が使用され、Ｗ 17・67 については真っすぐな加工性が高い樹種が選択されていることが分かった。長野県内の江戸後期の下駄と樹種選択の傾向は一致している。漆器椀類もトチノキやカツラなど軽軟で加工性のよい樹種であり、やはり長野県内の該期の傾向とされる。

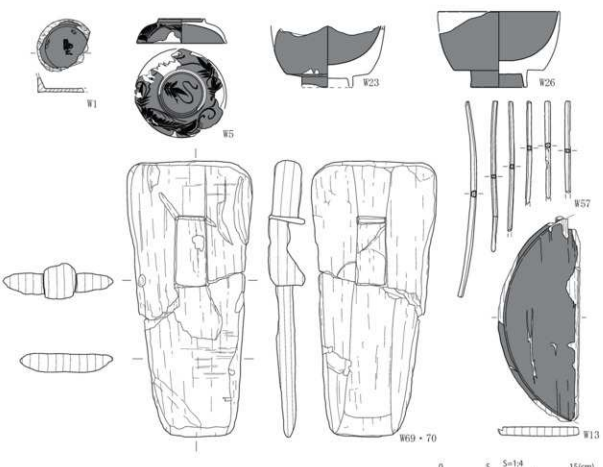


図29　木製品実測図（1）

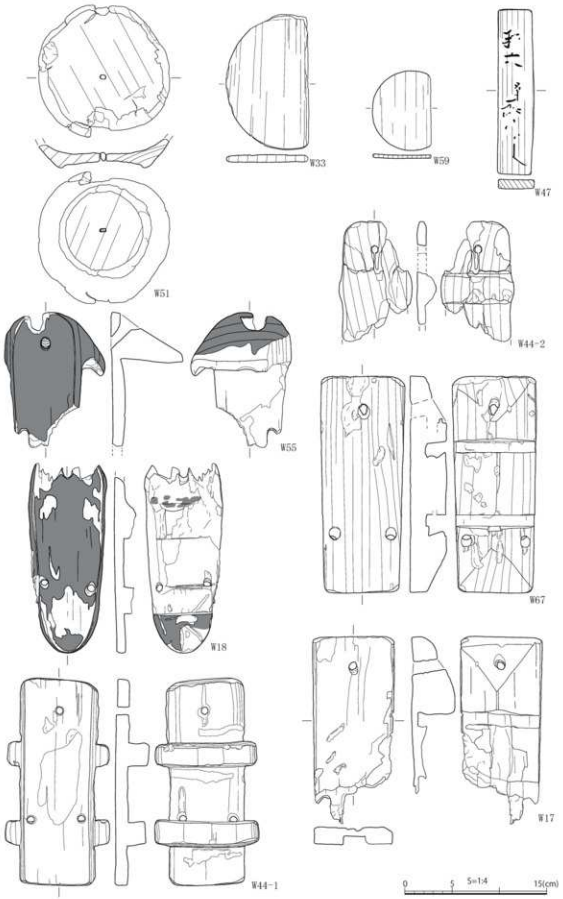


図30　木製品実測図（2）

木製品番号	遺構名	点数	種類	備考	図版番号
W1	SK18	1	漆器	椀状、黒漆、見込み赤色文字	29
W2	SK18	1	不明部材	板状、長(13)cm、幅(6)cm、厚5mm	—
W3	SK18	2	部材	曲物、側面長(190)cm、幅(9)cm、厚7mm、木明含む	—
W4	SK18	10	部材	曲物底部など、木明含む、最大長20cm	—
W5	SK196	1	漆器椀	黒色、外面赤色草文様、保存処理	29
W6	SK196	—	漆器	塗膜のみ残存、黒・赤色	—
W7	SK196	—	漆器	塗膜のみ残存、黒・赤色	—
W8	SK196	—	漆器	塗膜片、黒色・赤色	—
W9	SK196	1	漆器	板状、長13cm、幅5cm、厚3mm	—
W10	SK196	3	木片	—	—
W11	SK18	1	漆器	赤色、長(14)cm、径5mm、断面円形、先端扁平	—
W12	SK196	1	漆器	赤色、長(6)cm、幅5mm、厚3.3mm、断面楕円形、先端扁平	—
W13	SK196	1	漆器	盆状、上面赤色、裏面黒色、長(21)cm、厚5mm	29
W14	SK19	1	木製品	樽状製品底部、径34cm、厚2cm、1/2残	—
W15	SK19	1	不明製品	径12cm、厚1cm	—
W16	SK19	1	不明製品	径6cm、厚1cm	—
W17	SK19	1	木製品	漆器下駄、保存処理	30
W18	SK19	1	木製品	黒漆剪り小ぶき下駄、保存処理	30
W19	SK19	3	木製品	箸小片、他木片	—
W20	SK19	1	不明製品	板状、長(16)cm、径8mm	—
W21	SK19	—	木片	小片	—
W22	SK19	1	木片	板状、長(23)cm、厚3mm、不整形	—
W23	SK19	1	漆器椀	黒色、口縁欠損、保存処理	29
W24	SK19	1	漆器椀	黒色、底片	—
W25	SK19	6	漆器	底片、黒漆不明	—
W26	SK19	1	漆器椀	黒色、保存処理	29
W27	SK19	—	漆器	塗膜片、黒・赤色、赤色文様	—
W28	SK19	—	漆器	塗膜片、黒・赤色	—
W29	SK19	—	木片	小片多	—
W30	SK19	—	漆器	小片、黒色地に赤色	—
W31	SK19	1	漆器	板状、黒色、長(22.5)cm、幅(11)、厚5mm	—
W32	SK19	—	漆器	塗膜片、黒色地に赤色文様	—
W33	SK196	3	木製品	曲物底部、径14cm、厚8mm、不明部材・木片	30
W34	SK196	1	不明部材	棒状、長(23.5)cm、径5cm	—
W35・36	SK196	11	木片	箸片など	—
W37	SK196	2	木製品	木板、径2.5cm、径3.5cm	—
W38	SK196	1	木製品	樽状製品底部、径(45)cm、厚3cm	—
W39・40	SK19	6	不明部材	円形・八角形・板状、最大長(15)cm	—
W41	SK19	1	木製品	樽状製品底部、径(60)cm、厚1.5cm	—
W42	SK19	1	木製品	曲物底部、径12cm、厚4mm	—
W43	SK19	1	木製品	黒漆下駄、鼻片	—

表21　木製品観察表

（　）内は推存値

木製品番号	遺構名	点数	種類	備考	図版番号
W44	SK19	1	木製品	漆面下駄、剪りぶき下駄、保存処理	30
W45	SK19	1	木製品	箸、長(11)cm、断面方形	—
W46	SK19	3	木製品	箸・長(16.5)cm、木枠・径2.5cm、不明部材	—
W47	SK19	1	木製品	机状、木脚、長17cm、幅3.9cm、厚1cm、表面墨痕、保存処理	30
W48	SK19	5	不明製品	長15cm、幅9cm、厚4mm、長軸中位に孔2ヶ所	—
W49	SK19	1	木製品	曲物底部、径11cm、厚4mm	—
W50	SK19	7	木製品	木枠、薄い板状木片	—
W51	SK19	1	漆器盆	黒色、底部中央に孔、木片で栓無、保存処理	30
W52	SK19	1	木片	—	—
W53	SK19	2	木製品	黒漆差歯下駄、長(15)cm、幅6.5cm、厚5cm、木明部材含む	—
W54	SK19	1	木製品	黒漆差歯下駄、長24cm、幅6.5cm、厚5.5cm	—
W55	SK19	1	木製品	黒漆剪りぶき下駄、保存処理	30
W56	SK19	1	木製品	差歯下駄、長(14)cm、幅6cm、厚4cm	—
W57	SK19	7	木製品	箸、自然木片、保存処理	29
W58	SK19	5	木製品	曲物側板・底状など	—
W59	SK19	3	木製品	曲物底部、樹皮径8.5cm、厚3mm	30
W60	SK19	1	木製品	差歯下駄、長23.5cm、幅9cm、厚4cm	—
W61	SK19	2	木製品	差歯下駄、長(15)cm、幅8cm、厚3cm、木明不明部材含む	—
W62	SK19	3	不明製品	穿孔あり	—
W63	SK19	1	木製品	箸、長19cm、厚3mm、断面方形、先端薄い	—
W64	SK19	2	不明製品	黒色顔料塗布、コの字状、長14cm、幅5・8cm、厚4cm	—
W65	SK19	1	木製品	曲物底部、長(14)cm、厚3mm	—
W66	SK19	4	木製品	曲物底部、長(16・20)cm、厚5mm	—
W67	SK19	1	木製品	差歯下駄、保存処理	30
W68	SK19	1	木製品	箸、長19cm、厚3mm、断面方形	—
W69	SK19	1	木製品	風呂桶、台部、W70と同一個体	29
W70	SK19	1	木製品	風呂桶、台部、W69と同一個体	29
W71	SK19	1	不明部材	黒色顔料塗布、径13cm、径4cm	—
W72	SK19	5	木皮	—	—
W73	SK19	10	木片	板状、長12cm、径4cm	—
W74	SK19	3	木製品	樽状製品底部、径(29)cm、厚1.5～2cm	—
W75	SK19	2	木製品	樽状製品底部、径(30)cm、厚1.5～2cm	—
W76	SK19	1	木製品	曲物底部、径12cm	—
W77	SK19	1	木製品	土駄	—
W78	SK19	3	不明部材	長(25)cm	—
W79	SK19	8	木製品	木枠、径3cm前後	—
W80	SK19	1	木製品	木枠	—
W81	SK19	4	不明部材	—	—
W82	SK20	2	不明部材	—	—

銭貨番号	遺構	出土位置	銭文	初鋳年鋳造期間	法量(mm) 外径	内径	厚さ	重量(g)	備考
1	P242		永樂通寶	1017年	24.0	6.0	1.1	3.23	真書
2	SX1		至道元寶	995年	25.0	5.5	1.0	3.00	草書
3	SX1		元豊通寶	1078年	25.0	6.5	1.2	3.18	篆書
4	SX1		政和通寶	1111年	24.0	6.1	1.4	3.88	隷書
5	SX1		紹聖元寶	1094年	25.0	7.0	1.0	2.77	行書
6	SK16		—	—	23.0	6.0	1.0	2.25	未鑑定
7	SK16		寛永通寶	近世	23.0	5.0	1.2	2.73	未鑑定
8	SK16		—	—	22.0	5.0	1.2	1.77	未鑑定
9	SK16		—	—	23.0	4.0	1.4	1.59	未鑑定
10	SK16		—	—	23.0	4.0	1.2	2.38	未鑑定
11	SK16		—	—	24.0	6.0	1.8	1.97	未鑑定
12	SK16		—	—	—	—	—	1.82	小片、未鑑定
13	SK18・19・20	上層	—	—	21.0	6.0	0.8	1.26	欠損
14	SK18		寛永通寶	1636～1659年	25.0	5.5	1.3	3.10	古寛永
15	SK19	上層	寛永通寶	1697～1781年	21.8	6.0	1.0	1.74	背文、新寛永
16	SK196		紹聖元寶	1094年	23.0	6.0	1.3	3.19	行書
17	SK196		寛永通寶	1668～1683年	22.0	6.0	0.8	1.78	背文、文銭
18	SK196		寛永通寶	1636～1659年	24.0	6.0	0.9	1.75	古寛永
19	SK19		寛永通寶	1697～1781年	23.0	6.1	0.9	2.10	新寛永
20	SK19		寛永通寶	1697～1781年	22.1	6.2	0.9	2.22	新寛永
21	SK19		寛永通寶	近世	23.0	6.3	1.1	2.04	未鑑定
22	SK19		—	—	—	6.5	0.6	0.49	1/4残、未鑑定
23	1次debi		元豊通寶	1078年	24.2	7.0	1.3	2.85	篆書
24	1次debi		治平元寶	1064年	23.8	6.3	1.5	3.15	篆書
25	2次debi		元祐通寶	1086年	23.0	6.0	1.2	2.65	篆書
26	2次debi		至道元寶	995年	24.0	6.5	1.1	2.65	草書
27	2次debi		熙寧元寶	1068年	24.5	6.8	0.9	2.92	真書
28	2次debi		開元通寶	621年	22.0	7.0	1.0	1.80	欠損、内郭変形
29	2次debi	東部	寛永通寶	1739～1867年	22.1	6.5	1.0	1.95	鉄銭
30	掛土		寛永通寶	1668～1683年	24.5	5.8	1.2	3.51	文銭

表22　銭貨観察表

銭貨

出土した銭貨は30枚と破片数点で、破片については銭貨という以外判別不可能であった。30点については、長野県立歴史館においてX線透過撮影を行った。中国銭は検出面や$S\times1$、小穴から出土し、「寛永通寶」は主に地下室跡と曲物埋設遺構であるＳＫ16から出土した。「寛永通寶」は古寛永・文銭などを含み、初鋳年は、29を除き18世紀代以前となっている。

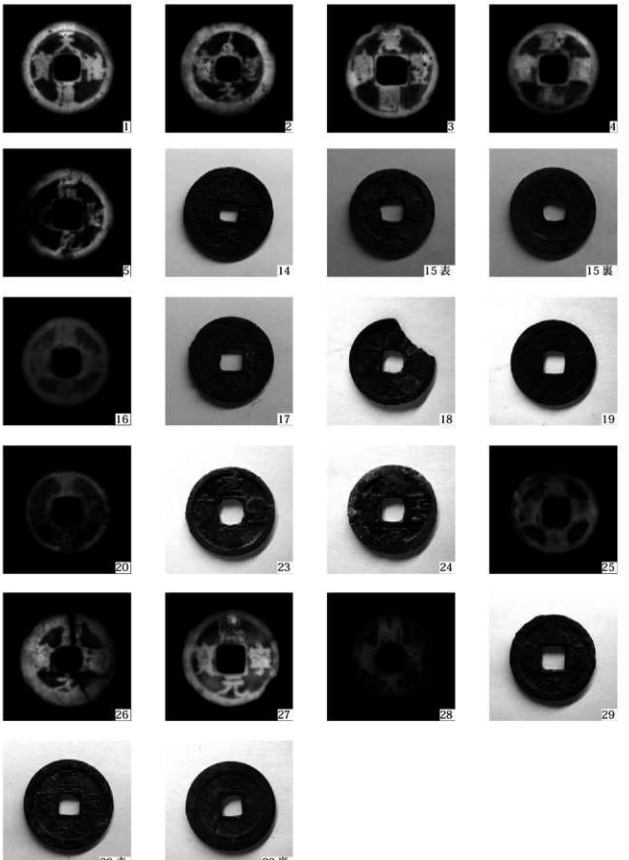


図 31　銭貨写真図版

第３章　自然科学分析

後町遺跡出土木製品の樹種同定

株式会社イビソク

1. はじめに

長野市の後町遺跡から出土した木製品の樹種同定を行なった。

2. 試料と方法

試料は、土坑などから出土した木製品 11 点である。時期は、いずれも 18 世紀後半～末と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とスギの 2 分類群、広葉樹ではカツラ属とブナ属、トチノキ、トネリコ属シオジ節（以下、シオジ節）の 4 分類群の、計 6 分類群がみられた。モミ属とブナ属が各 3 点で、トチノキが 2 点、スギとカツラ属、シオジ節が各 1 点であった。同定結果を表 1 に、一覧を付表 1 に示す。

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属　*Abies*　マツ科　図版 1　1a-1c(No. 12)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) スギ　*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don　ヒノキ科　図版 1　2a-2c(No. 3)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ 2～15 列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1 分野に普通 2 個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(3) カツラ属　*Cercidiphyllum*　カツラ科　図版 1　3a-3c(No. 2)

小型の道管がほぼ単独で密に散在する散孔材である。道管は 10～20 段程度の階段穿孔を有し、道管要素の末尾にらせん肥厚が確認できる。放射組織は上下端 1～3 個が直立する異性で、幅 1～2 列とな

る。

カツラ属にはカツラとヒロハカツラがある。代表的なカツラは、温帯の谷筋の肥沃な土地に生える日本固有種で、落葉高木の広葉樹である。材は軽軟で、切削加工は容易である。

(4) ブナ属　*Fagus*　ブナ科　図版2　4a-4c(No.10)

小型の道管が単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～10列である。

ブナ属にはブナとイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難ではない。

(5) トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　ムクロジ科　図版2　5a-5c(No.6)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で単列であり、層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

(6) トネリコ属シオジ節　*Fraxinus* sect. *Fraxinuster*　モクセイ科　図版2　6a-6c(No.7)

年輪のはじめに大型で丸い道管が3～4列並び、晩材部では小型の道管が単独ないし2個複合する環孔材である。軸方向柔細胞は周囲型である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1～3列である。

トネリコ属シオジ節にはシオジとヤチダモがあり、現在の植生ではシオジは関東以西の温帯に、ヤチダモは中部以西の亜寒帯から温帯の河岸や湿地などの肥沃な湿潤地に分布する、落葉高木の広葉樹である。材の性質はどちらも中庸ないしやや重硬で、乾燥は比較的容易、切削加工等も容易である。

4. 考察

一本下駄はブナ属とシオジ節であった。ブナ属とシオジ節は堅硬な樹種である（伊東ほか，2011）。

差歯下駄の台は、モミ属とスギであった。モミ属とスギはいずれも真っすぐで加工性の良い樹種である（伊東ほか，2011）。長野県内で確認されている江戸時代後期頃の下駄には、スギとシオジ節はみられないが、モミ属やブナ属は利用されている（伊東・山田編，2012）。

漆器椀はトチノキ、皿？はブナ属、漆器蓋はカツラ属であった。ブナ属は堅硬な樹種、カツラ属とトチノキは軽軟で加工性の良い樹種であり、いずれも漆器の木胎として多く利用される樹種である（伊東ほか，2011）。長野県内で確認されている江戸時代後期頃の漆器椀や蓋では、カツラ属やブナ属、トチノキが使われており、傾向は一致する（伊東・山田編，2012）。

箸と木簡はモミ属であった。モミ属は、真っすぐで加工性の良い樹種である。長野県内で確認されている江戸時代後期頃の箸ではモミ属もみられ（伊東・山田編，2012）、傾向は一致する。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社．

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌．238p，海青社．

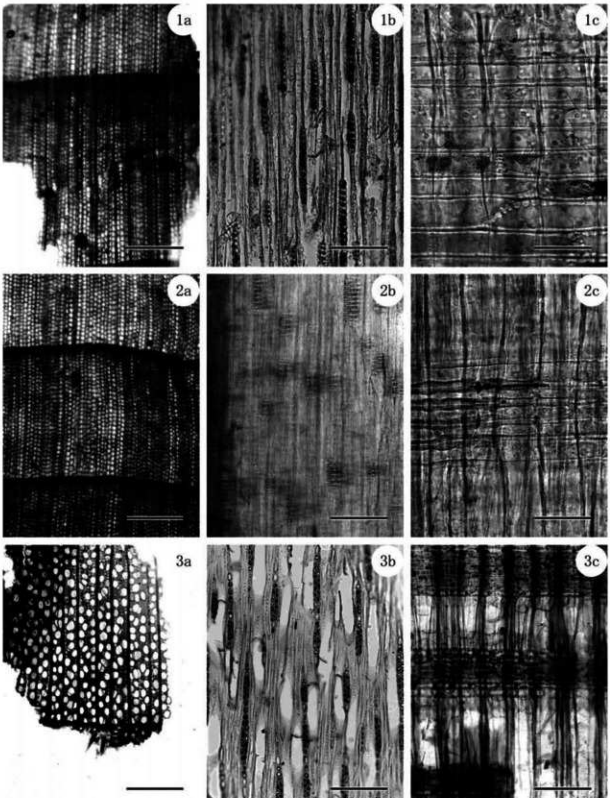
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学―出土木製品用材データベース―．449p，海青社．

技術協力

小林 克也氏（株式会社パレオ・ラボ）

付表1　後町遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

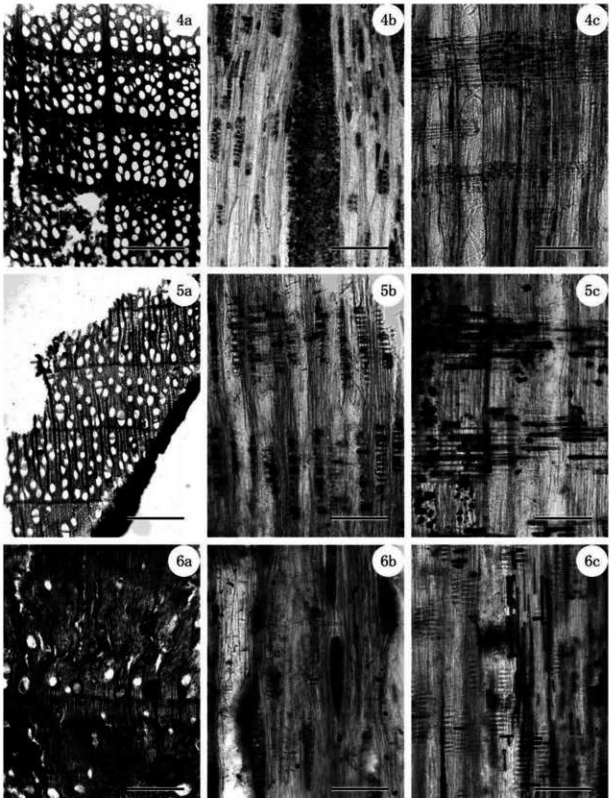
試料No.	取上番号	出土遺構・位置	器種	樹種	木取り	備考	時期
2	W5	SK19B	漆器盆	カツラ属	横木取り		18世紀後半～末
3	W17	SK19B	差歯下駄台	スギ	柾目		18世紀後半～末
4	W18	SK19B	一木下駄	ブナ属	板目	駒下駄	18世紀後半～末
5	W23	19	漆器椀	トチノキ	横木取り		18世紀後半～末
6	W26		漆器椀	トチノキ	横木取り		18世紀後半～末
7	W44	19	一木下駄	トネリコ属シオジ節	板目	駒下駄	18世紀後半～末
8	W47	19	木簡	モミ属	追柾目		18世紀後半～末
9	W51	19	皿？	ブナ属	横木取り		18世紀後半～末
10	W55	19	一木下駄	ブナ属	板目	のめり下駄？	18世紀後半～末
11	W57	19	箸	モミ属	芯去削出		18世紀後半～末
12	W67	19	差歯下駄台	モミ属	柾目		18世紀後半～末



図版1　後町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. モミ属(No. 12)、2a-2c. スギ(No. 3)、3a-3c. カツラ属(No. 2)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=1-2:50 μm・3:200 μm)



図版2　後町遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)

4a~4c. ブナ属(No. 10)、5a~5c. トチノキ(No. 6)、6a~6c. トネリコ属シオジ節(No. 7)

a:横断面(スケール=500 μm)、b:接線断面(スケール=200 μm)、c:放射断面(スケール=200 μm)

第4章　総　括

調査で検出された弥生集落は、周辺にある県町遺跡の弥生集落と同時期の集落と考えられ、調査区南側に位置する、平成 30 年度に調査された後町遺跡の集落とともに県町遺跡と何らかの関連性を想定できる。また竪穴住居跡のの配置からは、調査区よりさらに北に集落が広がる可能性も指摘できる。

中世は 13 世紀から 15 世紀にかけて、14 世紀を主体とした集落で、門前町南部の様相を捉えることができた。中世から近世にかけて、局所的な整地を繰り返して、遺構が激しく重複する状態であったが、小穴の分布から掘立柱建物跡の位置を 3 ヵ所想定することができた。小穴の大半は、善光寺門前町跡や西町遺跡で検出された区画溝と同一時期に埋没しており、善光寺門前町で何らかの画期があったことが想像される。近世段階では建物構造が掘立柱建物から礎石建物に変化していったと考えられるが、調査では礎石やその痕跡は確認できなかった。検出したのは井戸跡とみられる土坑や、地下室跡・曲物埋設土坑・石組不明遺構などであった。

地下室跡は、近世で多様な用途が想定され、金蔵・麹室・温室・防火倉庫などが文献資料から指摘されている。本遺構については用途を示唆する成果は得られなかった。構築時期は不明だが、19 世紀前半の早い段階に廃棄土坑に転用されたと想定され、出土遺物は町人層の器種組成を示す良好な資料となった。主に肥前系磁器と瀬戸美濃系陶器の安価な大量生産品を所持し、器種により産地が限定される傾向も確認された。善光寺周辺の発掘調査は、元善町遺跡や、本陣が所在する宿場の範囲である善光寺門前町跡、隣接する西町・東町遺跡で行われているが、本調査区は近世に料亭や水茶屋などがあった権堂の南にあることから、門前町内での場の相違に関する検討が今後の課題となろう。

引用参考文献

古泉　弘　1990『江戸の穴』（柏書房）

笹澤　浩　1970「長野市県町遺跡緊急発掘調査略報」『長野』30 号（長野郷土史研究会）

永井久美男　1998『近世の出土銭Ⅱ－分類図版篇－』（兵庫埋蔵銭調査会）

2002『新版中世出土銭の分類図版』（高志書院）

長　野　県　1982『長野県史』考古資料編主要遺跡（北・東信）（㈱長野県史刊行会）

長野市教育委員会　1998『長野遺跡群西町遺跡』長野市の埋蔵文化財第 87 集

2006『長野遺跡群善光寺門前町跡』第 115 集

2008『長野遺跡群元善町遺跡・善光寺門前町跡（2）』長野市の埋蔵文化財第 121 集

2009『長野遺跡群元善町遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第 123 集

2017『長野遺跡群県町遺跡』長野市の埋蔵文化財第 147 集

2018『長野遺跡群県町遺跡（2）』長野市の埋蔵文化財第 151 集

清水　竜太　2020「資料紹介長野遺跡群東町遺跡から出土した絵画土器について」『長野市埋蔵文化財センター所報』No.31（長野市埋蔵文化財センター）

長野市誌編纂委員会 1997『長野市誌』第 1 巻自然編（長野市）

長野市誌編纂委員会 2000『長野市誌』第 2 巻歴史編原始・古代・中世（長野市）

真砂遺跡調査会　1987『真砂遺跡』

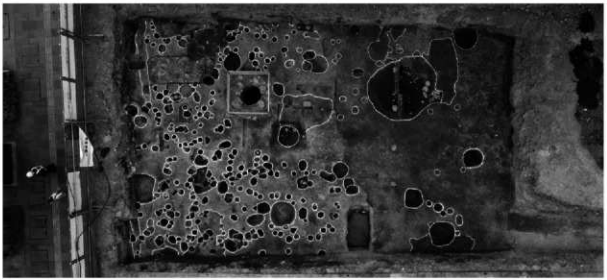
山崎　信二　2003「近世瓦の技法と編年」『関西近世考古学研究』XI（関西近世考古学研究会）

写真図版 1

調査区全景（上が北）

調査区南壁土層堆積状況（東区）

調査区南壁土層堆積状況（西区）



西区 2 次面完掘状況（上が北）

西区 3 次面完掘状況（上が北）

東区 3 次面完掘状況（上が北）

写真図版 3

SB 1

1

2

3

4

6

7

5

SB 3(1)

1

S B 3(2)

S B 4

S K 22

S K 5

S K 13(1)

写真図版 5

SK 13(2)

2

SK 14

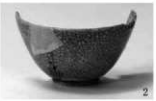
1

SK 15

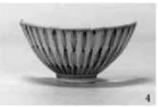
1

地下室跡(1)

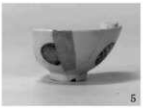
1



2



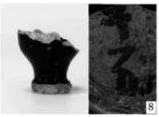
4



5

3

7



8

6

9

13

12

地下室跡（2）

10

15

16

11

14

19

17

18

18

20

21

写真図版 7

地下室跡 (3)

22

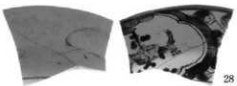
23

24

25

26

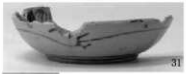
27


28

29

30

地下室跡 (4)



31

高台内銘

32

34

33

35

36

37

38

40

39

41

42

43

写真図版 9

SK 21

1

2

3

4

小穴

P6 1

P53 1

P166 1

P91 1

P264 2

P264 1

地下室跡出土木製品(1)

W1

W23

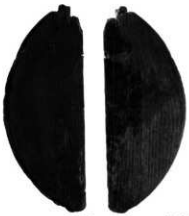


表　裏 W13

W5

W26

W51

W57

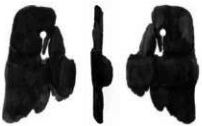
W33

W59

W69・70

W47

W55


W44-2

写真図版 11

地下室跡出土木製品(2)

W18

W67

W44-1

W17

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん　ごちょういせき
書　　名	長野遺跡群　後町遺跡
副 書 名	（仮称）間御所町賃貸住宅新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財
シリーズ番号	第 158 集
編 著 者 名	飯島哲也　田中暁穂　株式会社イビソク
編 集 機 関	長野市教育委員会　埋蔵文化財センター
所 在 地	〒381-2212　長野県長野市小島田町 1414 番地　TEL026-284-0004・FAX026-284-0106
発行年月日	2021（令和 3）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査 面積	調査 原因
ごちょういせき 後町遺跡	ながのしおおあざつるがあざ 長野市大字鶴賀字 まちやしき　ほか 町屋敷 1303-1 外	20201	C－025	36° 39′ 04″	139° 11′ 14″	20190422 ～ 20190704	443 ㎡	賃貸住宅建設工事

ふりがな 所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物
ごちょういせき 後町遺跡	集落跡	弥生時代中期後半	竪穴住居跡 3 軒・土坑 1 基	弥生土器・石器
		中　世 （13 ～ 15 世紀）	竪穴建物跡 2 軒・土坑 8 基・小穴 239 基・溝跡 2 条	青磁・陶器・須恵器・土器・銭貨
		近　世	地下室跡 1 基・土坑 3 基・不明遺構 2 基・小穴 6 基	陶磁器・土器・土製品・瓦・木製品・木簡・銭貨・石製品・金属製品・ガラス製品
		幕末～近代	土坑 2 基・不明遺構 1 基	土器・陶磁器・木製品・瓦・骨角製品・ガラス製品
		時 期 不 明	井戸跡 1 基	―――

要　　約

遺跡は裾花川河岸段丘上にあり、同一段丘上に展開する弥生時代中期後半の集落との関係が窺える。中世では 13 世紀から 15 世紀にかけて、善光寺表参道に伴う溝跡と密集する小穴群が検出され、門前町南部の広がりを確認することができた。近世前期には井戸跡とみられる土坑 1 基を検出し、該期の門前町における希少な遺構となった。町家裏手には長さ約 4.6m、幅約 2.7m の地下室跡が構築されているが、19 世紀初頭には廃絶され、廃棄された多量の陶磁器・木製品などの遺物群により、町人層の遺物組成などの情報を得た。中近世の遺構分布状況からは門前町の町家敷地の利用形態を看取することができた。

長野市の埋蔵文化財第158集

長野遺跡群

後　町　遺　跡

令和3年3月31日印刷・発行

発　行　　長野市教育委員会
編　集　　長野市埋蔵文化財センター
印　刷　　大日本法令印刷株式会社